
蒼炎の姫君

橘花音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼炎の姫君

【Nコード】

N5061D

【作者名】

橘花音

【あらすじ】

世界で十二番目の規模の国、ユーレニア。『双子の姉とは違って良い子』のミウは、その姉の婚約者に心を惹かれていた。そんな時、自分にも婚約の話が来て…

第一話

私は、つまらない子供だったと思う。

子供の特権である激しい感情の起伏を誰かに見せることは無かつたし、どうやって見せればいいのかもわからなかった。言われたことには全て従い、作業のようにそれを行っていた。その意味を考えることは無意味だと思っていた。

私はいつも、『双子の姉とは違って聞き分けの良い子』と言われていた。それが嫌だったわけではない。寧ろそのように振舞っていたら、私は褒められたし、随分得もしたと思う。

反対に姉のミアは、『妹とは違って言うことをきかない子』と言われていた。しかし、本人は、そのように望んでいたと思う。事あるごとに反発をし、周りを困らせるのが好きだった。私はそんなミアを疎ましく、羨ましくも思っていた。

近くで花火が鳴っている。今日はミアと、シュレニア国王子が婚約発表をした日だ。活発で社交的なミアは、あらゆる国の晚餐会に出かけ、よく名前も知られていたという。王子とは晚餐会で知り合い、ミアが一目惚れをしたらしい。実際、王子はとても美しい方だった。私も一度だけお見かけをしたことがあり、ふと目を奪われた。気が付いたら見惚れている、そんな方だった。

多くの国の姫から好意を寄せられていた王子がミアを選んだ理由は、シュレニア国と我が国は工業が盛んである為、と側近のティアナが言った。ミアは、自分がどこの国の姫よりも美しいからだと言いつけていたけれど。我が国とシュレニア国は、互いの技術を欲し

がっていたし、主要な輸出入国先も互いの国だった。つまり関係を結べば、ライバルではなく友として、工業の技術を高めていけるのだ。

今頃、大広間では、沢山の賓客が集まって二人を祝福しているだろう。私は何故か、歴史学の先生と共に世界の歴史を勉強しているように命じられた。きっと、幸せな二人を見て複雑な心境にならないようにという心遣いだろう。本当に、優しいお父様とお母様だ。

「ミウ様、今日は世界の哲学者をおさらいしていきましょうか。」

哲学者か…あんまり面白くないけど、仕方ないか。

私は先生が出したヒントから、人名を答えた。愛とか心とかの感情、四元素のことなどの考え方は、同じようで少しだけ違うので、ややこしい。

「ミウ様は、良く覚えておられますね。」

先生はいつも褒めてくれる。私はこの期待に応えられなくなるのが怖いのだ。今まで多くの期待があり、それに応えてきた。すると周りの人は満足してくれた。私はその満足した顔を見るのが好きだった。

「…先生、すみません、ちょっと休憩してもよろしいでしょうか？」

私は下腹部あたりがモゾモゾとしてきて、立ち上がった。

「ええ、よろしいですよ。」

書庫から出ると、手洗いへ行き、私は素早く用を済ませた。そし

て戻る途中、廊下の窓から、打ちあがる花火を見た。それは、黄色の大輪の花だった。次々とそれが咲いていく様は、圧巻で、ただ息を呑んでいた。

「ミア様、ここにおられたのですか？」

不意に後ろから声をかけられ、私は振り向いた。そこには、シュレニア国の王子がいた。

「あ…私はミアではなく、妹のミウです。」

この暗がりでは、わからないのだろう。背格好だけでは、ティアナさえ迷うほどだ。

「失礼致しました。お初にお目にかかります、ミウ様。私はシュレニア国第二王子の、グレンと申します。」

王子は、優雅に頭を下げ、そして頭を上げると、笑った。

「婚約者を間違えるなんて、ダメですね、私は。」

私は、その笑みに胸がドキドキして止まらなかった。それはいけない想いだと気づき、私は慌てて言った。

「いいえ、皆もよく間違えますから。私は、ユーレニア国第二王女のみウと申します。どうぞ姉のことをよろしくお願い致します。」

私も頭を下げた。そして頭を上げると、王子の姿がすぐ近くにあった。私は驚いて、後ろに飛びのくところだった。

「本当に似ておりますね。双子だから、当たり前なのでしょうが…ミウ様に関しては様々な噂が飛び交っておりますので、どんな方かと不思議に思っております。」

私の噂…というと、実は男とか、姉とは似ても似つかない醜女だとか、生まれてからずっと眠っているとか、そんな噂だろうか。私は、同盟国であるリロニア国以外の他国へは行かないから、いつの間にかそういう噂が広まってしまったらしい。

「お会いできて光栄です。今日は体調を崩されて欠席されたということですが、もう回復されたのでしょうか？」

そういうことになっていったのか。私は不用意に外を歩かない方が良かったな、と思った。おかげで王子の姿を見て、こうしてお話することはできたけれど。

「はい、もう回復致しました。お気遣い、ありがとうございます。では、用事があるので、そろそろ失礼致します。」

私は軽く会釈をし、早歩きでその場から去った。これ以上話すと王子がそれとなく出している色香にやられてしまいそうだ。もう彼は姉の婚約者となったのだから、余計な感情を抱いてはいけない。

第二話

翌日、私はお父様に呼び出されて、玉座の間へ行つた。そこには、お父様とお母様、リロニア国の王子がいた。

半年振りに見た、二歳年下の王子は少し背が高くなり、顔もやや大人びていた。王子は私を見つけると、走り寄ってきて、私の手を握つた。

「お久しぶりです、ミウ様。ずっとお会いしたいと待ち焦がれておりました。」

私より小さな王子は、大人の言うような事をさらつと言つた。

「私も、お会いしたいと思つておりました。会えて嬉しいです、王子。」

私の言葉に、王子の顔が綻ぶ。本当に素直な王子だ。私のように、投げられた言葉を曲げて受け止めるのではなく、そのまま受け止めるのだから。

「そなたたちは、本当に仲良しだな。見ているこっちが恥ずかしいよ。」

お父様はそう言い、お母様と顔を見合わせて笑つた。そうさせたのは、お二人でしょう。私が王子と仲良くすることで、リロニア国と友好的関係を保つ一因になるのだから。

「それでな、ミウよ。王子にはもう告げてあるのだが…お前と王子

の婚約を結びたいと思う。」

私は王子の顔を見た。王子は目を万華鏡のようにキラキラとさせて、私を見ている。

「もちろん、ミウ様の意思を尊重させて頂きたいと思っております。」

私の意思…断りたいならば断ってもいいということだろう。だが、断る理由は無いし、お父様もお母様も、私が婚約をすることを望んでいる筈だ。私と王子が結婚をすれば、特に軍事の面で連携をとり、その関係はより強固なものとなる。

「私のような者で良ければ、是非、お願い致します。」

私の手を握る王子の力が強くなった。

「我が命をかけて、一生お守り致します。」

私は微笑んで、うなずいた。

王子とは、小さい頃からの付き合いだった。何故ミアではなく、私を選んだのか。もしミアに、リロニア国王子との婚約の話がきたら、お父様はシュレニア国よりリロニア国を選んだらう。

王子が私を選んだ理由は、いつもミアが素直で純真すぎる王子をかわらい、その度に私が諫めて、王子を庇っていたからだ。彼は以前、「ミア様は苦手だけど、ミウ様は好き。」と言っていた。

私はそれが、姉を慕うような親愛の感情だと思っていたが、違っ

たようだ。彼はまだ十二歳だが、親愛と恋愛の区別はついているだろう。単なる政略結婚では無く、彼からの愛情があるという点では、良い方なのかもしれない。

私はどうだろう。王子のことは好きだし、いつも温かく迎えてくれるリロニア国の人々も好きだ。けれど、私は親愛の情しか持てない。小さい時からそう見てきたのだから、今更その見方を変えろと言われても、難しい。

もし私とミアが反対だったら、と思ってしまう。考えてはいけないことだが、何度頭の中で拒否しても、シユレニア国の王子のことを考えてしまう。決して叶うことはない思いなのに。

「婚約発表は、一週間後。式は、一年後にしよう。早速ミウの花嫁衣裳を注文せねばな。」

お父様とお母様は、とても嬉しそうだった。そう、二人が良ければ、私も良いのだ。

「ユーレニア国王、恐れながらも、お願いがあります。ミウ様の花嫁衣裳はこちらで作らせて頂けないでしょうか？私の国の絹はとても品質が高く、世界中から求められる程です。」

「そういえば、そうでありましたな。では、頼みました、王子よ。」

「代わりと言っては何ですが、指輪はこちらで作らせて下さい。ねえ、あなた。」

「ああ。二人に似合う、綺麗で繊細な細工を入れさせよう。色は…金と銀、どちらが合うかな？ミウの瞳は金色だし、王子の瞳は空の

ような青だし…」

「あなただったら、それはまだ考えなくても、十分に時間がありますわよ。」

何だか置いてけぼりになったようだ。私は、三人が嬉しそうに話している姿を遠くから眺めていた。

「リロニア国の王子と婚約を結んだんですって？」

私の部屋に入るなり、ミアはそうたずねた。湯を浴びたばかりなのか、髪は濡れ、布でそれを拭いている。こんな時のミアは、女でしかも双子の妹の私が言うのもおかしいのだが、とても妖艶だった。

「うん。」

「ということは、リロニア国へ行くのね。寂しくなるわ。」

リロニア国の王子は他に兄弟がないので、必然的に継ぐことになる。私は王子に嫁いでリロニア国へ行くが、ミアはこのまま城に住み続ける。シュレニア国の王子は第二王子なのでこの城に住み、お父様の跡継ぎは、ミアと王子の子供となる。

「いいわねえ。リロニアは、温暖で食べ物もおいしくて、海も山もあるし。」

私は、ミアが早く自分の部屋へ帰ってくれないかな、と思った。

いつからミアのことを苦手だと思い始めたのだろう。考えてみる

と、それは生まれた時からあったのかも知れない。言いようの無い違和感が、常に付きまとっていた。私と姿形はほとんど同じで、中身だけ違うこの生き物は何なのだろうと。そして私は、ミアとは全く別の人間なんだと思うようにした。その思いに心を任せていると、多少楽になった。

「他にも側室がいるんでしょう？リロニアは平和な国っていうけれど、他の側室から妬みを買って、刺されたりしたら大変だね。ミウに剣の使い方を教えてあげるわよ。」

そう言って、ミアは部屋から出て行った。そういえば私は、側室なんだろうか。誰もその重要な部分を言っていなかったし、私も聞きそびれてしまった。

まあ、いいか。側室であつたって、私は務めを全うするだけだ。

ミアが部屋に戻ってきて、私に一本の剣を渡した。練習用ではなく、本物の剣だった。

「同じですか？」

「いいでしょ、十分広いんだから。」

私は殆んど剣を持つたことが無い。それに比べて、ミアは兵士相手に、毎日剣を振るっている。そして、剣だけではなく、狩や乗馬もする。運動があまり好きではない私とは正反対だ。

「まずは、払い。これを剣で受け止めるの。」

私は、ミアが私に向けて振った剣を、剣の刃先で受け止めた。

「そう、中々うまいじゃない。」

ミアは次々と、剣を振ってきた。その度に私はぎこちなく、剣で止めた。私はほとんど後退していった。

「次は、突き。」

私の眼前に剣が迫ってきて、反射的に私は後ろに下がった。バランスを崩し、そのまま床に倒れ、剣を落とした。

「だめねえ。本当に弱いんだから、ミウは。」

ミアは剣を持ったまま近付いてくる。

「ミア…！もう…やめてよ！」

「ミウったら、髪をそんなに振り乱しちゃって、みっともないわ。直してあげる。」

ミアの手が私の髪に触れ、私の髪を一つにまとめた。その瞬間、何かが切れる音がした。私がミアを見つめると、ミアの手には、切られた私の髪があった。

「邪魔そうだったから、切ってあげたのよ。短い方が似合うわ、ミウ。」

本気で言っているのだろうか。いや、そんな訳は無い。私は声も発せられず、呆然と座り込んだ。

女の髪は、腰までの長さが一番美しいというのが、世界共通の認識だ。そして、王族や貴族では、女は髪を長くするのが暗黙の了解だ。しかも一週間後には、婚約発表を控えている。これでは、他の王家の良い笑い者であり、我が国とリロニア国にとっては恥さらしだ。

「それじゃあ、お幸せにね、ミウ。」

ミアが去っていった部屋の中で、私は必死に考えを巡らせていた。どうしよう、このままではお父様とお母様、それに王子に申し訳が立たない。延期、いや中止を…できるのだろうか。でもまた腰まで髪を伸ばすには、一年以上かかる。

その時、ドアをノックする音が聞こえた。私の心臓は飛び跳ねた。

「ミウ様、おられますか？地理学の勉強の時間ですよ。」

ティアナの声だ。ティアナに話して、一緒に考えてもらおうか。いや、そうしたら、ティアナは私が何も言わなくても、ミアを疑って問い詰めるだろう。でも、だからといって、これを隠し通すことはできない。

「ミウ様？お加減でも悪いのですか？」

答える前に、ドアが開いた。そして私の姿を見て、あっと小さく声を漏らした。

「ミウ様…その髪は…」

瞬時に悟ったのだろう。彼は踵を返した。

「待って、ティアナ！」

私はティアナの腕を掴んで止めた。そして中へ入れ、ドアを閉めた。

「これは、私がやったことです。いいですね、ティアナ？」

思わず私は言ってしまった。しかしティアナは、首を横に振った。

「いけません。王に報告し、ミア様にしかるべき処置をして頂かなければ。ミウ様のお心はわかりますが、度を越しています。」

彼の顔から、怒りの表情が読み取れた。彼はいつも、私の肩を持つてくれる。

「いいえ、ティアナ。もしお父様に話し、この事が外に漏れれば、ミアの婚約は破棄されるかもしれません。私はそれだけは避けたいのです。ミアの為でなく、我が国とシュレニアの為です。」

「しかし、リロニア国はどうするのですか？シュレニア国より、リロニア国の方が、我が国にとっては大事です。」

「もしミアが私の髪を切ったと釈明しても、王子やリロニア国王は許してくれないかもしれません。それよりは、確実な方を選ぶべきです。」

「王や王妃は、きっと気付きますよ。髪を切ったのは、ミア様だと。」

「いいのです、私が自分でやったと言えば、表面上はそういうこと

になります。ミアは自分でやったと言っことは無いでしょうから。」

「ミウ様がそこまでおっしゃるのなら……わかりました。でも、本当によろしいのですね？」

私はうなずいた。こうなってしまっでは、仕方ないのだ。他に方法はない。

「では、まず王妃のもとへ参りましょう。王は今公務中ですから。」

私はティアナについていった。海に沈んだ鉄のように、足取りが重い。私は、つい数時間前まで嬉しそうに話していた三人の顔を思い出し、キリキリと痛む腹を押さえた。

第三話

二日後、王子は自ら来てくださり、髪の毛の短い私と対面した。髪を切ったのは、髪が絡まって解けなくなり、それを切るうとしたところ、手元が狂って多く切りすぎてしまったという何とも間抜けな理由だった。その事情は伝え聞いていたようだが、やはり私を見て、驚かれた表情をした。

私は王子に向けて、深く頭を下げた。

「大変申し訳ございません。このような姿となってしまう、弁明する余地もございません。」

「ミウ様… すみませんが皆様、ミウ様と二人だけにして頂けないでしょうか？」

その王子の声に、扉が開いて、皆が出て行く様子がわかった。私はずっと頭を下げていた。

「顔を上げて下さい、ミウ様。」

私は、顔を上げた。王子は不安そうな顔をしている。

「ミウ様、一つ聞きたいのですが…ミウ様は、私との婚約が嫌で、髪を切ったのではないですよね？」

「もちろんです！私は王子と婚約できることを嬉しく思っております。それに一年後の結婚式も、とても楽しみにしております。」

「それなら、いいのです。」

王子の顔から、曇りが消え、晴れていった。

「それだけが心配だったのです。ミウ様がそう思ってたので下さるのなら、婚約発表は予定通り五日後、式は一年後に行いましょう。」

「でも…よろしいのですか？私の髪は…」

「私は、ミウ様の髪が長いから、婚約を申し込んだではありませんせん。」

王子はきつぱりと言いつつ切った。

「ミウ様の髪が短くても、私の気持ちに変わりはありません。それに短いのが気になるようでしたら、ヴェールみたいなものをかぶればいいと、母が申しておりました。本当は式の時にかぶるようなのですが、婚約発表でもかぶる方はいますし、おかしくないでしょう。つて。」

私はその言葉に救われた。できるならば、へたり込んで頭を床につけ、これまでの緊張を解くように大泣きしたいところだった。だけれどその気持ちをこらえ、私はまた王子に頭を下げた。

「ありがとうございます。本当に、王子のような方が婚約者で、私は幸せ者です。」

「そんなに畏まらないで下さい。これからミウ様と私は、夫婦になるのですから。っていつても、まだ一年もありますけれど。」

変わらず大人びた口調に、私は頭を下げたまま、苦笑した。

部屋で泣いてスッキリした私は、ミアのことを思い出すと腹が立ってくるので、気を紛らわせるために書庫へ向かった。ミアは、お父様に呼び出されて、一週間の国外追放を命じられた。建前は、体中に出来物が現れたので、温泉治療に行くというものだった。

私は五冊の本を持って書庫から戻る途中、後ろから声をかけられた。

「ミウ様！」

振り向くと、シュレニア国の王子がいた。

「お久しぶりです。沢山本をお持ちですね。私が運びましょうか？」

「いえ、大丈夫です。お気遣いありがとうございます。」

少しの沈黙のあと、王子は笑顔で言った。

「髪、お切りになったんですね。とても似合っておりますよ。」

それが例え気遣いだったとしても、本心から言ったように感じられた。彼の笑顔が、そう錯覚させるのだ。

「ありがとうございます。これでミアと見分けがつくでしょう？」

「髪が短くなくても、ちゃんと見分けはつきますよ。ただ後姿がわかりにくかったです。」

王子は笑顔のまま、飄々と言った。

「そうだ、申し遅れましたが、ご婚約おめでとうございます。リロニア国の王子は、良い伴侶を得られましたな。」

「いえ、とんでもないです…ありがとうございます。それでは、私はこの辺で失礼致します。」

私は逃げるように、その場から去った。また王子の発する色香にやられそうだった。気を抜いたら、くらくらと倒れるかもしれない。

「見ましたよー？」

突然廊下の角からティアナが顔を出し、私は危うく本を落とすところだった。

「もう、ティアナ…！驚かさないでください…それに王子とは何もありませんから。」

「別に私は、王子のことなど一言も言っていないんですが？」

しまった、と私は思った。目の前の中性的な顔は、微笑んでいた。

「リロニア国の王子には黙っててあげましょう。ですが…」

「わかっています。シュレニア国の王子に傾いたりはしませんよ。」

そんなことは絶対にしない。お父様やお母様、それに皆の期待を裏切るような真似は、絶対にはいけないのだ。

「さすがミウ様、わかっていらっしやる。あ、そうそう、明日衣装合わせがありますから、予定を空けておいて下さいね。」

「明日、もう衣装合わせを？」

ドレスは一昨日注文していたようだが、それにしても出来るのが早い。

「ええ。縫製屋に、徹夜で間に合わせてもらう予定です。リロニア国の方々は、とつても楽しみにしておられますので。もちろん、私も楽しみにしております。ミウ様がドレスを着る姿なんて、滅多に見られませんから。」

ティアナは、乙女のように顔を輝かせている。彼女、もとい、彼女は、女装趣味があり、とてもがっしりとした体格に女物の甲冑を付けている。これでも他国から引き抜きの誘いが来るほどの、剣の腕前だ。私とミアのお目付役でもある。

「そうだ、ミウ様、お気づきになりました？」

ティアナは、何かを見せるように首を横に振った。いつも後ろで束ねている薄茶の髪が揺られ、その髪は肩まで短くなっていた。

「どうしたんですか!？」

いつも、髪は私の命よりも大切、と言って髪の手入れを欠かさず伸ばしていたのに。剣の稽古中に少しでも切られようものなら、鬼のような形相で相手に飛び掛っていたのに。

「ミウ様お一人だけ髪を切られては寂しいのではないかと…私は一応男ですから、ミウ様と違って全く重大な問題ではありませんが…これが少しでもお慰みになるのであれば、私は幸せです。」

何という心遣いだろう。私は、ティアナが私の側にいてくれて本当に良かったと思った。いつも彼は、私がミアに何かされた時には素早く察知し、的確に対処してくれた。彼がいたからこそ、何の取り柄も無かった私は、『いい子』に昇格できたのだ。皆がミアばかり構って、私は放って置かれたままだったら、今よりもっとひねくれた子供になっていたに違いない。

「ありがとう。でも、綺麗な髪だったのに…」

ティアナの心遣いは嬉しかったが、私は彼の髪が好きだった。真っ直ぐで滑らかで、明るい茶色の髪は、愛と知の女神『レシリア』と同じだった。とても珍しい色だった。

「いいんです、また伸びますから。一緒に伸ばしましょうね、ミウ様。」

「ええ。今度、良い育毛剤を教えてください。」

「とっておきがあるんですよ。湖底の泥を使っているっていうものが。でも王には話したりしないでくださいね。全部使われてしまいますから。」

お父様の髪の毛は、かなり痩せている。こんな風にティアナがお父様のことを言えるのも、私だけでなく、お父様やお母様からも絶大な信頼を得ているからだった。

私は、お父様が育毛剤を使っているところを想像して笑った。最近、特に気にするようになってきたからなあ。

第四話

どうして会いたくないと思った人には、出会ってしまったのだろう。

本音を言えば、とても会いたい人だったが、私の中では無理やり『会いたくない人』にしていたシュレニア国の、第二王子。

私は彼と向かい合って、お茶を飲んでいる。婚約発表の時に着る候補の内の一つだったドレスを着て。

「いい天気ですね。」

王子が、窓を見ながら言った。

「ええ……とても。」

側にはティアナがいるので、私は落ち着かなかった。別にいなくても、王子と何かあるわけじゃないのに。そんな怖い顔して王子を睨まなくても。

そもそも何故私が王子とお茶を飲んでいるのかと言うと、またもや廊下で偶然会った王子に、「故郷の知り合いが珍しいお茶を持ってきてくれたので、一緒に飲みませんか。」と誘われたからだった。断ることは失礼にあたるので、私はお茶を飲ませて頂くことにした。

私は、当日着るドレスがやや地味だというので、新しく刺繍や宝石を施し、仕立て直している間、別のドレスを着て暇を持て余していた。ドレスは仕立て直さなくても十分綺麗だからと言ったが、こういう時の私の意見は通らない。お母様は、「ドレスくらい派手に

しなきゃ。」と言っていた。ということは、私は地味だということか。

「お口に合いますか？」

「ええ、とてもおいしいです。」

と言ったが、王子の持ってきたお茶は、不思議な味だった。渋味と甘味が混ざり合ったような、今まで味わったことのないお茶だった。おいしいと言えなくは無いが、好んで飲むことはないだろう。

「ミウ様、無理をなさらなくても大丈夫ですよ。中途半端な味ですね、これ。」

王子がはつきりと言ったので、私は当惑した。

「今度はもっとおいしいお茶を用意します。」

また、王子とお茶を飲めるのだろうか。二人でこうやって向かい合って。私は嬉しくて、その表情を隠すのに必死だった。

「ミアが帰ってきたら、三人で飲みましょう。」

彼女の名前を聞いたとたん、私の胸はぎゅゅと締め付けられた。まるで心臓を鷲& amp; #25681;みされたように。

そっだ、今私がここにいるのは、ミアの代わりだからだ。もしミアがいたら、私となんてお茶を飲んでいない。

「…はい、そうですね。」

私は、そう答えるのが精一杯だった。ただ王子の美しい顔が目に入ってきて、私は消えてしまいたいと願った。何故ミアなのだろう。私もミアのように晩餐会へ出かけていければ良かった。そうすれば、ミアより早く、王子と早く出会えたかもしれない。

だが、もし王子と出会っていても、結果は変わらないとわかっていた。何をやったって、ミアの方が上なのだ。彼女は常に、私の二歩も三歩も先へ行っていた。私がミアに叶う筈は無い。

「ミウ様、ドレスが出来上がったそうです。行きましょう。」

ティアナの声に、私は我に返った。

「わかりました。王子、今日はどうもありがとうございます。ご馳走様でした。」

私は王子に礼を言うと、立ち上がった。そして歩き出した時、普段履き慣れない高い靴が傾いた。

「あっ！」

とつさに立ち上がった王子の手が、私の手を支えた。

「大丈夫ですか？」

私は慌てて王子から手を離すと、

「すみません。」

と言つて、ティアナのもとへ行つた。心臓が高鳴つて、破裂してしまふさうだつた。

ティアナには気付かれたかもしれない。けれど、彼は何も言わなかつた。いつも通り、穏やかな目で私を見守つていた。

私は、鏡の前に立つて、新しく仕上がつたドレスを着ていた。お母様や侍女たちが何か私に声をかけてくれたけれど、私の耳には届かなかつた。どれだけ美しく着飾つたつて、あの人の為ではないのだ。この姿は、我が国と、リロニア国の為にある。

「ミウ様、リロニア国王子がいらつしやいました。」

今日は、来る予定では無かつた筈だ。何かあつたのだろうか。

「ミウ様、ヴェールを持ってまいりました。」

王子の手には、赤いヴィロードの箱があつた。小さな王子の腕いっぱいに納まつている。

「まあ、王子。わざわざありがとうございます。」

お母様は言い、その箱を受け取つた。

「綺麗な蒼…ミウに似合つわ。」

お母様は私に、そのヴェールをかぶせた。ヴェールは、床につくぐらい長く、髪を結えば短いことはわからなささうだつた。水色のドレスを仕立て直して、サファイアの宝石をつけたのは、このヴェ

ールと合わせる為だったのか。それにしても何故、蒼なのだろう。王子の瞳の色がそうだからだろうか。

「私のミウ様に対する印象が、空や海のような蒼だったので…そのヴェールとドレス、ミウ様に変似合っておりませぬ。まるで空と海を纏っているようで…そうだ、ミウ様、今私の母上も来ているのです。その姿を、母にも見せて頂けませんか？」

「リロニア王妃もいらしていたのですね。ミウ、私は先に行って、ご挨拶をしてくるわ。」

お母様は、部屋から出ていった。

「さあ、行きましょう。」

王子は私の手を引いて、歩き出した。そこで得体の知れぬ違和感が、私を襲ってきた。

私が欲しいのは、この手じゃない。私が欲しいのは…

思わず私は、王子の手を振り払ってしまった。

「ミウ様、どうしたのですか？」

「あ…」

私は自ら、王子の手を握った。

「申し訳ございません。少し立ちくらみをしてしまいました。」

私が無理やり笑うと、王子は微笑んでくれた。

「お疲れなのかもしれませんね。少し休んでから行きましようか？」

「いえ、もう大丈夫です。ご心配をおかけしました。」

優しい王子。この方は、とても立派な王になられるだろう。でもその隣に立つことを望んでいない私がいる。何故、これ程までに苦しいのだろう。私の役目なんて、ずっと前から理解していた筈だったのに。

歩き出した途端、ヴェールがずれて、床に落ちた。その瞬間、私は全てどうでもよくなってしまうた。

第五話

その夜、私は眠ることができなかつた。胸が苦しくて、苦しくて、死にそうな位痛かつた。思い出した王子の手があまりに温かくて、私は泣いた。

何とかして、王子に私の想いを伝えたい。けれどそうすることなど出来ない。どうすればいいのか。やはり私は、この想いを封印するしかないのだろうか。

少し夜風に当たろうと、部屋を出た。しんと静まり返った廊下には、自分の足音だけが響く。私は中庭に出て、そこにある椅子に腰掛けた。遠くで虫の声が聞こえ、冷たい風が肌に触れる。

そのままぼうつと宙を見つめていた時、誰かの話し声が廊下の方から聞こえた。

「…婚約は解消しないのですって？全く、あの王子も本当に馬鹿ね。」

私と同じ声。まさか、どうしてここにいるのだ？

「ああ、退屈だわ。外に出られないなんて、気が狂いそうよ。素直に国外追放されていた方が少しは退屈じゃなかったかもしれない。」

「そんなことを言うてはいけませんよ。王は本当にお優しい。建前は国外追放として、地下に身を隠すだけで済んだのですから。」

女官長のシルバの声。

そういうことだったのか。私に気を遣って、ミアを国外追放したと嘘をついたのか。お父様は、ミアが可愛いのだ。私よりも、ミアの方が可愛いのだろう。

一体私は、何なのだろう。今まで必死に『いい子』でいたのが、馬鹿馬鹿しくなってくる。私は、何の為に生きているのだろう。ただ一つ言えることは、自分の為ではないということだ。

このままりロニアへ嫁ぎ、王子の子を産み、育てる。それだけで終わってしまう人生。虚しいと感じるのは、私が間違っているのだろうか。

私もミアのように自由に生きてきたかった。己の心そのままに行動し、好きな人を自分で見つけ、その人と添い遂げる。今の私では、もう無理だ。全て手遅れになってしまった。

翌日、私は何もする気が起きなくて、ただベッドに寝転がってぼうつとしていた。時々、ティアナが来て、私の具合が悪いと思った彼は、薬や食事を持ってきてくれた。

「ゆっくり休んで下さいね。何かあれば、呼んでください。」

彼の優しさに私は癒されて、同時に悪いなと思いつながら食事を取り、薬まで飲んだ。

薬のせいもあって、ウトウトとしていた時、ドアをノックする音が聞こえた。

「ミウ様、私です。お加減はいかがでしょう？」

シュレニア国の王子の声だ。私は眠気が一遍に飛んで、体を起こした。

「具合が悪いと耳にしましたので、滋養の薬を持ってまいりました。入ってもよろしいでしょうか？」

私は返事をしようか迷った。このまま狸寝入りしようか。こんな寝起きの姿を王子に見られたくない。

だがそれよりも、王子に会いたいという気持ちの方が勝ってしまった。私は急ぎ手ぐしで髪を整え、衣服の乱れを直すと、答えた。

「はい、どうぞ。」

ドアが開き、王子はベッドの横へ来た。

「思ったより、顔色が良さそうで安心しました。」

王子は、ほっとした顔で、私を見つめた。王子の手には、円柱の瓶があり、中は黄土色の液体で満たされていた。

「ご心配をおかけして申し訳ありません。わざわざありがとうございます。」

私は嬉しさの中にも、情けなく、恥ずかしい気持ちが入り混じった心境で、そう言った。

「いいえ、心配するのは当然です。あなたは、ミアの大切な妹君で

すから。」

私は唇を噛んで、表情を出さないよう堪えながら、王子からその瓶を受け取った。涙が溢れてきそうだった。

「ありがとうございます…けれど、もう、私のことは放っておいてくれませんか？」

私は勇気を出して、そう言った。彼がいるから、苦しくなるのだ。優しいから、期待をもってしまうのだ。ならばいつそのこと、私のことを『いないもの』としてほしい。

「迷惑でしたでしょうか？」

王子の目尻が下がり、悲しそうに私を見る。違う、そんな顔を私は見たいのではない。

「いいえ…そんなことはなくて、ただ…」

私は言葉に詰まった。王子を悲しませてしまったことに、後悔の念が覆いかぶさる。

「ただ、何でしょう？」

王子の新芽のような瞳は一点の曇りもなく美しく、それに映し出された私はあまりに惨めだった。気がつく、魔法をかけられたように私は涙を流していた。何も考えられなくなって、遂に私はその言葉を言ってしまった。

「私はあなたのことを、お慕いしているのです。」

複雑に入り混じった心情とは裏腹に、自分でも驚くくらい、その声ははつきりと通っていた。当惑した王子の顔を見ていられなくて、私は目を伏せた。

「ミウ様…そのお気持ちは嬉しいのですが、私はあなたの姉の夫となる者です。ですので、このような感情は…」

持つべきではないし、言ってもいけない。それは当たり前のことなのだ。彼はきつと、私を軽蔑しているだろう。私は取り繕うように、声を詰まらせながら言った。

「わかっております。ただ、伝えたかっただけなのです。だからもう、私に構わないで下さい。あなたの姿を見ると、私は辛いのです。」

「…わかりました。できるだけ、あなたの前に姿を現さないようにします。そして時間が経ち、その想いがなくなったら、また私と会って下さい。」

そう言うと、王子は出て行った。私は、声を押し殺して泣いた。少しでも声が聞こえたなら、ティアナは血相を変えてやって来るだろうから。

第六話

『ユーレニア国の第一王女、第二王女のどちらかが、お前の妃となる』

物心ついた時から、父上にそう言われてきた。ユーレニア国のミア王女とミウ王女、いつ知り合ったかわからない程小さい頃から知っていた。

我が国にとって工業の技術先進国であるユーレニアは、我が国の代表的輸出産物である絹を生産するのに、欠かせない国であった。ユーレニアとの交流は、私の祖父の代から続いている。

ミア様とミウ様は、美しい双子として、他国にも有名であった。ただ、双子でも、ミア王女は苦手だった。私の嫌いなミミズをわざわざ集めて、部屋のベッドに入れたり、私が通るところに糸を引いて転ばせたりした。

その度に私は泣いて、ミウ様に慰められた。ミウ様は、ミミズを一匹残らず掌にのせ、地に還し、転んだところには薬を塗って手当てをしてくれた。

『ミミズは、何も悪さはしませんよ。土を食べて、栄養豊富な場所に変えてくれるんです。ミミズがたくさんいるところは、野菜や果物もおいしいんですよ。』

『王子、大丈夫ですか？今薬を塗りますね。痛いでしょうが、すぐに治りますよ。』

ミウ様の優しい笑顔を見ているだけで、私は幸せな気持ちになった。ミア様が我が国へ来るのは嫌だったけれど、ミウ様が来ると知った時はとても嬉しくて、夜に寝られないほどだった。

ある時、ミウ様たちが国へ戻るのを見送ったあと、私は父上と母上に言ったことがあった。

「ミウ様とずっと一緒にいられたらいいのに。」

すると父上は、それをユーレニア国王に伝え、二人で秘密裏に私とミウ様の婚約を決めたらしい。

そして六日前、私とミウ様の婚約が正式に決まった。私は、これからミウ様とずっと一緒にいられるのかと思うと嬉しくて、一日中にやけていた。そんな時、ある報告が入った。

「ミウ様の髪が、ミア様に切られた？」

私は驚いて、耳を疑った。なんだってミア様は、そんなことをしたのだ。四賢人の一人、ルト・メドウスの息子、ロロも理解できないというような表情を浮かべている。彼は私より二つ年上で、ユーレニアに送り込んでいる四賢人の一人との連絡役をやってもらっている。

「ミウ様を妬んで、とかですかね？」

「だって、ミア様は、シュレニア国のあの第二王子と結婚したんだろっ。」

見目麗しく、穏やかで優しいという評判のあの王子と。私は顔だ

「知っているが、中身については良く知らない。」

「そうなんですけどね。私にはわかりません。」

「けれど、嫌がらせなのは明らかだろう。王にしかるべき対処をして頂かねば……」

「しかしミウ様は、自分でやったとおっしゃっているようですよ。」

「…え!？」

ミウ様は、短くなった髪で私と対面した。そして深々と頭を下げ、謝罪の言葉を述べた。ミア様がやったとは、やはり一言も言わなかった。

私は、不安になってミウ様に訊ねてみた。もしか本当はミウ様が自身で切ってしまったのだとは思ったからだ。私との婚約が嫌だと思っただけに。しかしミウ様は、否定した。

「私は王子と婚約できることを嬉しく思っております。それに一年後の結婚式も、とても楽しみにしております。」

そのミウ様の言葉に、私は安堵した。

そして今日は、ミウ様との婚約発表の日。とても空が蒼く、隅々まで晴れ渡っていた。

私は着替えをすませると、ミウ様を迎えに行った。部屋から出てき

たミウ様は薄い水色のドレスを身にまとって、蒼いヴェールをかぶっていた。

その姿はいつにも増して美しく、私は硬直して見つめていた。まるで女神のようで、触れるのさえためらってしまいそうだった。

けれど、どこかミウ様は浮かない顔をしていた。

「王子、ミウ様のお手を取って下さい。」

ティアナに言われて我に返り、私はミウ様の手を取った。

「では、参りましょうか。」

私の言葉に、ミウ様は、私ではないどこか遠くの場所を見て、うなずいた。

第七話

なんで私、こんなところにいるんだろう。

私を得たかったのは、この場所？いつも『いい子』でいて、その代償に得られたものは、私の欲しいものじゃなかった。

私の手を引いてくれる王子。温かくて、力強い。だけど、私は…

吹き抜けのホールに辿り着く。そこでは他国の王族、城の者、一部の国民たちが、一階の席だけでなく二階の席までびっしりと席を埋めていた。

結婚式をリロニアで行うかわりに、疑似結婚式のような婚約発表をここで行うのだ。指輪の交換や誓いのキスは無いけれど、互いの手の甲に口づけをしなければならない。

お父様とリロニアの国王がホールの中心にいて、私と王子はゆっくりと歩いて進んでいった。人々の視線が、刺さるように痛かった。

「これより、リロニア国王王子リユード・ゼノキアと、ユーレニア国第二王女ミウ・シグナの婚約発表を執り行う！」

お父様が、声を張り上げた。それに応えるように、客席から歓声が上ががる。しかし、それを切り裂くように声が上がった。

「お待ち下さい！」

振り返ると、ミアが走ってきた。お父様は血相を変えて、ミアの肩をつかんだ。

「お前…何故、出てきたのだ！」

「ごめんなさい、お父様…！でも一つ、言わせて下さい！実は、リユード王子をお慕いしているのは私なのです！」

その言葉に、ホール全体がどよめいた。

「な、何を言っているのだ、お前は…！お前にはシュレニア国の…」

「違うんです、本当に好きなのは、リロニアの王子なんです！」

ミアの目からは、涙が溢れていた。私は、はっと気が付いて歩き出そうとしたが、王子が私の手を離さなかった。

するとリロニアの国王が、一歩前に踏み出して言った。

「ミア王女よ、それが例え事実だったとしても、この二人の婚約は決まっているのだ。二人とも、そう望んでおるしな。なあ、王子と姫よ。」

「もちろんです！ねえ、ミウ様。」

「あ…」

真っ直ぐ見つめてくる王子の瞳を見ても、私はうなずくことができなかつた。するとお父様が慌てたように、

「とにかく、二人の婚約は決定だ！二人とも、部屋へ戻るが良い！」
と叫ぶように言った。

きれいなドレスを着たまま、私は椅子に座ってぼうつと外を眺めていた。夕日が怖いくらい美しく、私はミアのことを思い出していた。ミアとあの夕日は、とても似ていた。

どこの王族だったか、私とミアを、月と太陽と形容したことがあった。その方は、ミアの明るい雰囲気太陽に例え、私の静かだという雰囲気月を例えた。

けれど私はできるならば、太陽になりたいと思った。人々を照らし出す太陽に。月は人に恵みを与えないけれど、太陽は人に恵みを与えることができる。

「ミウ様、お茶、飲みませんか？」

王子が紅茶の入ったカップを、私に差し出してくれた。私は受け取って、それを一口飲んだ。この茶葉は、リロニアのものだ。とても深い味で、苦みが少なく、私の好きなものだった。

「ありがとうございます。とても美味しいです。」

王子は、私の隣に座った。

「ミウ様、一つ聞きたいことがあるのですが…本当にミウ様は、私と婚約をするのが嫌ではないのですか？」

その言葉に、私の胸が震えた。沈黙の後、堪え切れなくて、私の目から涙が零れた。

「申し訳ありません…！私、本当は…」

手をぎゅっと握りしめる。駄目だ、言っちゃ。お父様とお母様の期待を裏切ってしまう。

「言つて下さい。私は大丈夫ですから。」

王子が優しい口調で私に言った。私は、みっともなく、堰を切つたように喋ってしまった。

「他にお慕いをしている方がいるんです…！でもその方とは絶対に結ばれなくて…それにお父様もお母様も、王子との婚約を望んでいるし…どうしたらいいのかわからなくなって…」

「その…お慕いしている方とは？」

王子は変わらず、優しい口調で言った。

「…シユレニア国の…ミアの、婚約者です…」

長い沈黙が訪れた。広い部屋に、私の嗚咽だけが響いていた。

すると突然、王子が椅子から立ち上がった。

「私は絶対に、ミウ様を幸せにします！」

唐突な言葉に、私は顔を上げて王子の顔を見た。王子はとても、真剣な顔つきをしていた。

「絶対に泣かせたり、悲しませたり、不幸にさせたりしません！だから、お願いです！私にチャンスをくれませんか？私はミウ様に相応しい男になります。ゆっくりと時間をかけて、私のことを知って下さい。あなたが私のことを好きになってくれるまで、いつまでも私は待ちます。」

一息で言いきった王子の頬は、紅潮していた。何故、ここまで私を好きになってくれるのだろう。王子に好かれる相手が、私で良かったのだろうか。

「どうか、お願いします、ミウ様。」

王子は、私に頭を下げた。私は慌てて、その肩を上げさせた。王子が頭を下げる相手は、国王だけだ。

「駄目です、王子…頭を下げるなんて…」

「私にとってミウ様は、誰よりも尊い存在です！だから、いいんです！」

そう言ってまた王子は、頭を下げた。そうだ、昔から王子は頑固なところがあって、譲れないところは決して譲ろうとしなかった。

ふと、昔言った王子の言葉が甦ってきた。

『ねえミウ様、どうして泣いているのですか？』

『あ…ちょっと、ミアに…でも、もう大丈夫です。』

『ミア様が！？私、言ってきました！ミウ様を苛めるなって。』

『いいですよ、王子。大丈夫ですから。』

『駄目です！だってミウ様は、私の一番大切な人なんだから！』

王子だってミアが怖いのに、勇気を振り絞って言いについて…あの頃から王子は、私を守ってくれていた。

けれど王子のことを、私は良く知らない。本当はどんな性格をしているのか、どんな本が好きなのか、どんな生活をしているのか。

すると王子は、顔を上げた。

「そうだ、ミウ様。結婚は先延ばしにして、まず恋愛期間ということにしませんか？」

「え？」

「ミウ様が私のことを好きになってくれた時に、結婚をしましょう。それまでは、婚約中の恋愛期間ということ、どうですか？」

「恋愛…期間？」

「そうです。結婚式は未定。ずっと婚約中ならば、両国の関係にヒビが入ることもないでしょう。ただ一応婚約中ですので、ミウ様には、我が国で過ごすことになって頂きますが。」

恋愛期間。それも良いのかもしれない。リロニアへ行って暮せば、シュレニア国の王子のことも忘れられるかもしれない。ミアとは会わなくてすむし…

なんだか後ろ向きな理由だけど、王子の顔を見てみると、何とかなるような気がしてきた。この小さな王子は、私のことを本当に良く思ってくれている。

もっとこの王子のことを知りたい。それを知ってから決断しても、遅くはない筈だ。

「行きます、リロニアへ。」

その言葉に、王子の顔が綻んだ。つられて私も、さっきあんなことを言ったのに、嬉しくなってしまった。

第八話

あの日以来、私はミアと会えなかった。ミアがあの時流した涙の理由をずっと考えていたけれど、確信が持てなかった。

だってミアは、シュレニアの王子が好きで、婚約をしたのだ。本当はリユード王子が好きだったなんて、そんなこと、有り得ない。有り得ない、筈だ。

「ミウ様、準備は整えられましたか？」

ティアナの声がして、私は立ち上がった。

「はい。」

返事をする、ドアが開いた。私は小さくまとめた荷物を右手に持って、ティアナのもとへ行った。

「お持ちします。」

「いいですよ、軽いですから。」

荷物は本当に軽かった。何を持っていけば良いのかわからなかったからだ。お母様からもらった手鏡と、お父様からもらったミアとお揃いのネックレス、それに数冊の本だけだ。

聞けば、リロニアに全て私の必要なものを揃えてくれたというし、体一つで行くしかなかった。

「ミウ様、お話があるのですが…」

ティアナは言い、私は顔を上げた。少し、気まずそうな顔をしている。

「どうしたのですか？」

「実は私は、リロニアから遣わされた者なのです。」

私はその言葉の意味がわからず、首をかしげた。

「ミウ様とリユード様の婚約の話は、もう五年前からあったのです。私はリロニア国王から命じられ、この城へ来て、本当にミウ様がリユード様に相応しいか見極めてくれと言われました。もちろんこのことは、あなたのお父様も知っています。」

「っていうことは…ずっと私たちのお目付け役をしながら、見張っていたってということですか？」

「まあ…そういうことになります。本当に黙っていて申し訳ありません、ミウ様。」

ティアナは、私に頭を下げた。今までずっと、試されていたという事か。

「それで、ティアナ。私は合格だったんですか？」

ティアナは顔を上げ、笑顔で言った。

「もちろんです。ただ、満点ではありませんけれど。さあ行きまし

よう、ミウ様。リユード様が待っています。」

ティアナは私の荷物を持って、歩き出した。それを追って、私も歩き出した。

「どつやったら満点になれるんですか？」

「ミウ様は少し、我がままにならないといけません。」

「我がまま？それって…」

悪いことではないのだろうか？

「時には自分の思うようにやりたいと、わめき散らすことも必要ですよ。」

「そう…ですか…」

そんなこと、私にできるのだろうか。いや、私は、そんなことをしたら嫌われるのではないかと思って、きつとできないだろう。

城の門の外には、お父様とお母様、従者たち、リユード王子がいて、その後ろに数台の馬車があった。

私はお父様とお母様の手を握って、言った。

「行ってまいります、お父様、お母様。」

二人は涙ぐんでいて、思わず私も泣きそうになってしまった。

「体に気を付けて、元気でな。」

「時々、顔を見せに来てね。」

「はい。」

私は二人と抱き合つと、一步下がって礼をし、リユード王子の手につかまって馬車に乗り込んだ。

馬車のドアが閉まると、馬車はすぐに走り出した。私はお父様とお母様、城の者たちが見えなくなるまで手を振った。

結局最後まで、ミアの顔を見ることができなかった。

「大丈夫、ユーレニアとリロニアは近いのだから、何度でも顔を見せに行けますよ。」

リユード王子が気を遣つてか、そう言ってくれた。私はうなずいて、窓から見える景色を目に焼き付けた。

なんとなく、そう頻繁に戻ることは無いだろうと、私は思った。

リロニアへ着いたのは、太陽が少し西に傾いた時だった。昨日良く眠れなかったせいもあって、私はいつの間にか眠ってしまった。いて、王子に揺り起こされた。

窓から見える景色は、半年前に見たときと変わらないリロニアだった。リロニアは岩盤の間に街が造られているので、要塞のように

も見える。片側は海に面し、漁獲高も高い。人口は世界五位、経済発展率は世界三位で、最も住みやすい国の一つと言われていた。

馬車は、岩盤のように高くそびえる門をくぐり、街の中へ入っていった。その街道には、花を持った人たちがたくさん、歓喜の声を上げていた。

「みんな、私たちをお祝いしてくれているんですよ。あんまり大ごとにして欲しくないって言ったんですけど…」

「そ、そうなんですか…」

私は少し怖くなってしまって、王子の方へ身を寄せた。

「馬車を、降りましょうか？」

「え？」

「せっかくみんな、お祝をしてくれているんだし…歩いて、城まで向かきましょう。」

そう言うと王子は馬車から降りて、私のドアの方へ回り、ドアを開けた。私は差しのべられた手につかまって、地面に降りた。

歓声が一段と高くなったのが聞こえる。リロニアは陽気な人が多いと聞いていたけれど、本当にみんな明るそうだ。

「行きましょう、ミウ様。」

私は王子と手をつないで、城へ向かって歩き出した。夢のような、

やけにふわふわとした空気の中で、王子の手だけがはっきりといた。

城へ着くと、私は国王と王妃に挨拶を済ませ、王子に自分の部屋へ案内された。

部屋は、白と蒼で統一されていて、とても爽やかな雰囲気の部屋だった。私は一目でその部屋が気に入ってしまった。

「ミウ様、どうですか？部屋は……」

「私のすごく好きな部屋です。ありがとうございます。こんな部屋に住めるなんて……」

「よかった、気に入ってもらって……あ、私の部屋はあそこなんですけれど……」

王子が指をさした先は、とても離れた場所だった。

「随分、離れていますね。」

「でしょうか？実は、秘密があるんですよ。」

王子は嬉しそうに言い、鍵を取り出した。

「すみません、失礼しますね。」

私の部屋へ入ると、王子は、壁の布で隠された場所をどかした。するとそこには扉があり、王子はそこに鍵を差し込んで開けた。

「どうぞ、ミウ様。この部屋は、私とあなたしか入れない秘密の部屋です。」

私は、その秘密の部屋に足を踏み入れた。そこでは窓がない代わりに天井から光が降り注いでいた。簡易的な炊事場と、テーブル、ソファ、ベッド。壁は本棚で埋まっていた。

「あのもう一つの扉は、私の部屋に通じています。ここにはお風呂もトイレもありますし、普通に生活することができます。」

「何故…このような部屋を？」

「我が国の風習なのだそうです。父上は、大人になればわかる、と。」

「はあ…」

大人になれば、か。一体どんな理由があるんだろう？

「ミウ様、私はできるだけミウ様と会える時間をつくるつもりですが、政務の手伝いで中々会えないこともあると思います。」

「そう…ですね。」

リロニアでは、我が国より大きい分、抱える問題も多いだろう。特に最近、流入してくる難民をどう受け入れるかが議題になっているという。初代王の政策である、空腹の者たちには食糧を分け与える、ということが今も続いていた。

「だからせめて、毎日少しでも会える時間を作りませんか？例えば夜、何時からとか…その時間には、ここで集まるようにしましょう。」

「そうですね。それが良いかもしれませんが。では、何時からにしますか？私は何時でも構いません。」

「夜九時から十時までは、どうですか？私は十時には寝なければいけないので…」

「時間が決められているんですか？」

「いえ、自分で決めているんです。十時には寝ないと、早く成長できないうつて。」

それを聞いて、私は思わず笑ってしまった。王子らしい理由だ。

「だ、だって早く、ミウ様の背を追い抜きたいんです！」

王子は、赤い顔で言った。

「では、九時から十時までにしませう。早く背が伸びるといいですね、王子。」

「絶対に追い抜かしますから！見ていて下さい。」

私と王子は毎晩その秘密の部屋に集まって、その日の出来事や、リロニアやユーレニアのこと、政治のことから哲学のことまで、とにかく何でも話した。

王子は博識で、私より幼いのに、私以上の知識を持っていた。聞けば、十歳までに城の中の本は全て読みつくしたらしい。道理で大人びていたわけだ。

王子が私の背を追い抜かしたのは、一年後。王子が私より頭一つ分も大きくなったのは、三年後だった。

第九話

リロニアは年中温暖な気候だが、この季節は特に過ごしやすい時期だった。晴れの日が多く、雨は定期的に週一回降るくらいだ。

風は涼しくそよぎ、太陽の熱を丁度良く冷ましてくれた。我が国では雨の日が多かったから、こういった晴れの日が続くと嬉しい。

私はカゴに、軽食と傷薬、ガーゼを持っていつもの場所へ向かっていた。城の裏庭にある、草原。そこではティアナとリユード王子が、剣の訓練を行っていた。

王子は政務の手伝いだけでなく、体を鍛えることも怠らなかった。その為か、今ではティアナが本気を出すくらいの腕になっていた。

今日も、激しい音を出しながら木刀を打ち合っている。ある時、ティアナが私の方を見て、

「あ！」

と言った。つられて王子も私を見て、

「あ…ミウ様！」

と言い、顔を綻ばせた瞬間、ティアナの木刀が王子の足を払った。

「つたた…」

王子は体を起こして、足をさすった。

「スキを見せてはいけないとあれ程言ったのに…全く、王子はもう…ミウ様、王子に手当をして頂けますか？」

「はい。」

私は王子の隣にしゃがんで、カゴから傷薬を出した。

「毎度すみません、ミウ様…」

王子は裾をまくり、擦り剥いたひざを見せた。私はそこに薬を塗り、ガーゼで包んだ。

「いいんですよ、これも私の仕事ですから。」

「さて、じゃあこれで終わりにしましょうか。王子は休憩をしたら、着替えて、執務室へ。私は退散します。」

ティアナはそう言って、去って行った。ティアナがリロニアの者であったと知った日から数日後、もう一つ大きなことを知った。実は彼がリロニアの四賢人の一人であったということだ。

四賢人とは、リロニアの王を支え、良き理解者となって政務をこなし、また武術にも優れている者のことだ。彼らは、王に次ぐ権力を持っている。

ティアナは最年少で四賢人となったらしく、その実力は誰もが認めている。現在は特に王子の側について、見守っている。

「ミウ様、今日は何を持ってきてくださったんですか？」

王子はお腹を空かせているようで、カゴを覗き込んだ。この三年で王子はとても大きくなってしまった。まるで手の届かない程に。

「豚肉をローストして挟んだパンです。それと、ユゴの実。少し時期が早いみたいですが、今年もおいしく獲れたようですよ。」

私は王子に手拭きを渡し、それからパンを渡した。

「頂きます。」

「どうぞ。」

王子はとても美味しそうに、そしてあっという間に食べ終えた。最近特に食欲旺盛で、量も前より二倍程になっていた。もう少し持つてくれば良かったな、と私は思った。

「とても美味しかったです、ありがとうございます。あのですね、ミウ様：来週、父上の誕生日があるんですけれど……」

「そうですね、来週でしたね。」

国王の誕生会には、毎年各国から王族が集まり、祝辞を述べにくる。私はそういう場が苦手なので、参加はせず、事前に祝いの言葉を申し上げるだけだった。

「是非今年は出席して欲しいんです。というのも、中々ミウ様はそういう場に姿を現さないのです、変な噂が流れているらしいんですよ。監禁されているとか、本当は死んでいるとか。失礼な話ですよねえ、全く。」

王子はいつになく、怒ったような顔をしていた。

「そうですか…ではたまには、姿を見せた方が良いでしょうね。」

「出席して頂けるんですか？」

「ええ。」

「本当ですか！？では早速ドレスを作らせます！色は、何色が…あ、宝石の手配も…！」

「そ、そんな大ごとにししないで下さい！普通のドレスで十分ですから…なんならあの婚約発表の時に着たものでも…」

「あ、そうですね。あれにしましょう！少し手直しをさせて…」

私より王子の方が張り切っていることに、私は笑ってしまった。

ユーレニアへは、年に二、三度帰るくらいだったが、ミアとは一度も顔を合せなかった。聞いた話だと、シュレニアの王子との婚約関係はまだ続いているらしい。だけど、式を挙げる予定は無いそうだ。

ミアの様子をたずねても、お父様もお母様もお茶を濁すだけだった。あのミアのことだから、きっと私のことなんか忘れて、うまくやっている…と思ったかっただけけれど、最後に見たあの涙がどうしても忘れられなかった。

もしかして、ミアは本当に王子のことを…

「ミウ様、もう着替えてよろしいですよ。」

「あ、はい。」

来週の誕生会で着るドレスを脱ぎ、私は普段着に着替えた。体型は三年前とほとんど変わっていないから、サイズの調整はほとんど無いようだ。

ただ、デザインが少し子供っぽいとのことで、大人っぽく手直ししてもらったことになった。

裁断室を出ると、そこにはメルノン・ファンダキアがいた。彼女は私と同じ年で、四賢人である父を持つ。幼い時から彼女もそうなるように育てられ、何でも幅広くこなす。

「ミウ様、夕食の手伝いへ行きますか？」

「はい。」

彼女はティアナの代わりに私の護衛となり、今では一日で最も長い時間を過ごす相手となった。

私は裁縫などの習い事もするけれど、一番好きだったのが、料理の手伝いだった。この国では国王以外の王族も、城の者に混ざって仕事をする。『その苦勞を知らない者は、命令をしてはいけない』という決まり事があるからということだった。

メルノンは私と同年なのに、私より何でも良く出来た。料理も裁縫も、最初は彼女に教わっていた。

仕度をして料理室へ入ると、皆、下ごしらえをしている最中だった。

「姫様、今日も手伝って下さるんですね。」

料理長が柔らかい笑顔で話しかけてくれた。

「ええ、ほんの少しのお手伝いですけど…」

「助かります。では、その野菜を千切りにしてもらえますか。」

「はい。」

私とメルノンは包丁を持ち、作業に取り掛かった。

リロニアの国の人は大らかで、ちょっと大雑把過ぎるところもあるけれど、皆優しくて明るかった。私はユーレニアの国の穏やかな雰囲気も好きだけれど、リロニアの夏風のような雰囲気も好きだった。

この三年間、泣いたことは一度も無い。故郷を愛しく思って寂しかったことも、不思議と無かった。

私はこの国に、上手く馴染めたのだと思う。それはきつと、リュード王子をはじめとして、優しい者たちに囲まれていたからだ。

大広間から音楽が聞こえ始めた。どうやら国王の誕生会は、始まったようだ。

「ミウ様、迎えに上がりました。」

リユード王子の声だ。私は鏡の前から立って、扉の方へ向かった。女官たちが扉を開け、私は正装をした王子と対面した。

このようにきちんとした服を着た王子を見るのは、初めてだった。いつも見慣れた顔の筈なのに、その時は、違って凛々しく見えた。

「では参りましょう。」

私は差しのべられた手を取り、王子と手を繋いで大広間へ向かった。

「三年前の気持ちを思い出すようです。」

王子は言い、微笑んだ顔を見せた。

「あなたの姿が綺麗で、真っ直ぐに見ることができなかった。今もそうなんですけれどね。」

私はその言葉に照れてしまって、顔を伏せて歩いた。何故だろう、三年前なら、ただ嬉しく思うだけだったのに。

大広間へ入ると、広い会場内に多くの賓客が着飾って、談笑をし

ていた。しかし私たちが会場内を進んでいくことに、静かになっ
ていった。

何か、人を静かにさせるようなことをしているのだろうか。歩
き方が変だろうか、それともどこか衣裳が？不安に思う私とは対象に、
王子は力強く歩いていった。

私たちは王の座っているところまで行き、先に王子が祝辞を述べ
た。

「国王、この度はおめでとございます。今後もお体を大事にして、
長生きして下さるよう。」

「うむ。そなたが王位を継がぬちは、私も気が抜けないからな。
そなたも体に気をつけ、日々精進を怠らないよう。」

「はい、ありがとうございます。」

「国王様、おめでとございます。これからも益々のご活躍、期待
しております。」

私は言い、頭を下げた。

「ありがとう。リユードはそなたのような者が婚約者で、幸せだな。
本音を言うと、結婚してもらえたらもっと良いのだが。」

国王は冗談のような本音を笑って言った。

「父上！全くもう…ミウ様、少し踊りませんか？」

王子は私の手を引いて、中心の方へ歩き出した。

「で、でも私、あまり上手ではなくて…」

「大丈夫です。ミウ様なら、踊れます。」

曲が始まり、私は王子のエスコートを受けながら、何とか足を動かした。

「次は右足前、後ろ、二歩前。」

私は踊りよりも、腰にまわされた腕の方が気になって、集中できなかった。王子の腕って、こんなにたくましかったっけ。

それに顔がすごく近くて、私は目を合わせられず、王子の胸ポケットのスクーフばかり見ていた。

やがて曲が終わり、王子は私から手を離して、

「喉渴いていませんか？何か持ってきますね。」

と言い、飲み物を取りに行った。

その時窓を見ると、空に花火が上がリ、夕闇に美しく照らし出された。私はふと、ミアとシュレニア国王子の婚約発表の日の花火を思い出した。

ミア、今頃、何をしているんだろう。

私はもつと間近で花火を見たくて、バルコニーへ続く扉を開いた。

あの時、私は一人だった。けれど寂しさを感じようとしなくて、そんな感情を捨ててしまつて、花火を眺めていた。花火を美しいとも思わなかった。

今は違う。花火が美しいと思える。この三年で、私の心は何かを得たのかもしれない。

「ミウ様、寒くありませんか？」

後ろから声をかけられ、振り向くと、王子が二つのグラスを持って歩いてきた。王子はグラスをバルコニーの手すりへ置くと、自分のマントを取って、それで私の体を包んでくれた。

「ありがとうございます。」

そう私が言うと、王子は突然、私を抱きしめた。

「お、王子…どうしたのですか？」

しかし王子は答えないで、ずっと私を抱きしめていた。王子の腕の中は力強く温かくて、とても居心地の良い場所だった。

花火の上がる音がし、その度に夜空が明るく映し出される。私は目をつぶって、王子の温もりを辿っていた。

「ようやく…ミウ様を抱きしめることが出来ました。」

王子は、囁くように静かな声で言った。

「ずっとこうして抱きしめたかったけれど、腕が足りなくて…早く大きくならないかなあと、毎日お祈りをしていました。」

「…でも、きつと、毎日十時には寝ていたおかげですよ。」

王子は笑った。

「そうですね。これからはもう少し夜更かしが出来ます。あの…実はミウ様にお願いがあって…」

そう言つと、王子は私の体を離した。

「王子！ミウ様！」

ティアナが走つて、私たちのところへやって来た。彼はひざまづいて、言った。

「報告します！ミア様がお一人で、我が国へ来ました！」

何か良くないことが起こつた、と私は感じた。背筋が凍る瞬間をこれほど実感出来たのは、この時以外無い。

第十話

何故、ミアがここにいるのだ。

私は信じられない心境で、天使のように微笑むミアの顔を見つめていた。そしてその横には、リユード王子の兄であるエルライド様がいた。

エルライド様はリユード王子より3つ年上で、生まれた時から足が悪く、車椅子を使っている。
また、側室の子ということ、王位継承権は与えられなかった。

人前に姿を見せることは滅多に無く、私もこの三年で会ったのは一度だけ、昨年の王の誕生会の時だった。

「ミア…どうしてここに？」

私がつねると、ミアはゆったりと優雅に口を開いた。

「私の欲しいものを手に入れる為よ。」

私は意味がわからず、リユード王子の顔を見た。王子はこれまでに見たことがないくらい、険しい顔つきをしていた。

「ミア王女、それに兄上、これはどういうことですか？」

リユード王子がつねると、エルライド様は低い笑い声を漏らした。その声に、会場全体の温度が下がったような気がした。

「どういふこと、だと？ただ父へ祝いを述べに来ただけだ。私の妻と共にな。」

「妻…！？」

エルライド様はミアの腰に手を回した。

「私の妻の、ミア・シルバだ。」

「ミアが、エルライド様の妻…？どうして？そんなこと、有り得ない！」

「だってミアは、シュレニアの王子と…」

「飽きちゃった、あんな王子。面白くないんだもの。」

「飽きた…？」

私の脳裏に、あの優しい笑顔が甦ってきて、私の心は痛んだ。それに、お父様とお母様…どんなにこの事態を憂えているだろう。

その時、国王様の重厚な声が会場内に響いた。

「エルライド、どのような意図があって、ミア王女を妻に迎えたのだ？」

「それはもちろん…私が王になる為ですよ。…メルバ！」

王の隣に立っていた四賢人の一人であるメルバ殿は剣を抜き、国王の喉元に突きつけた。メルバ殿は、メルノンの父親だ。

「メルバ殿…！」

ティアナの悲痛にも似た声が響いた。

「さあ、王よ。今ここで誓って下さい。王位を私に譲ると。」

エルライド様の笑いを含んだ声は、会場内に響き渡った。

「王位をお前に譲ったら…我らやリユードはどうなるのだ。」

「サング島へ行つて頂きます。あなた方が良く訪れていたあの避暑地に。そこであなた方は、ゆっくりと休めば良い。その生を終えるまで、ずっと。」

「ミウ様は…」

王子が、口を開いた。

「ここに残ってもらう。お前たちが変な気を起こさぬよう、また、ユレニアを手に入れる人質としてな。」

「良かったわね、ミウ。あなたの好きなこの国にずっといられて。」

私の頭の中は、真っ白になっていた。ただわけもわからず体が震えて、どうすることもできなかつた。それがミアへの怒りなのか、これから起こることへの畏怖なのか。いや、何も出来ない自分に対しての憤りだったかもしれない。

「国王よ！早くご決断を！でなければ先に、王妃の首が飛びますよ。」

「
見ると、王妃の横にいる兵士も剣を抜いていた。

不意に、私の耳元に声がかかった。

「必ず、迎えに参ります。どうか、それまでご辛抱を……」

リユード王子は、王と王妃の方へ向き直り、声を張り上げた。

「王よ！私からも願い申し上げます！どうか王位をエルライド殿へお譲り頂きますよう！」

すると王は、長く息を吐き、

「わかった。」

と答えた。

「王位をエルライドへ譲る！これで良いな、エルライド。」

エルライド様は、満面の笑みで答えた。

「ええ、ありがとうございます、父上。そしてさようなら。もう一度と会うことは無いでしょう。」

「この女が、あんたの見張りよ。」

ミアに紹介された私の見張り役は、メルノンだった。メルノンは、顔をうつむかせたまま、私に礼をした。

「逃がしたら、許さないからね。それとミウ、あんたも逃げようなんて気を起こすんじゃないわよ。」

私はもう、ミアにどうしてこんなことをしたのか聞く気力さえ無かった。私はメルノンと共に自分の部屋へ向かった。

「ミウ様、私……」

見ると、メルノンは泣いていた。私は、辺りに誰もいないことを確認すると、メルノンの腕を引つ張って、自分の部屋に入れた。

するとメルノンは、突然床に頭をつけた。

「申し訳ございません……私のせいで……このような事態に……」

私はしゃがみ、メルノンの肩に触れた。

「メルノン……どういうことですか？知っていることだけでも、話してくれませんか？」

メルノンは、涙で濡れてぐちゃぐちゃになった顔を上げた。

「父は、エルライド様へ寝返らないと私を殺すと……だから……だから私がいなければ、こんなことには……！」

「それは違います！メルノン、あなたがいなくても……この事態は避

けられなかったでしょう。」

「どうすることも出来なかった。私は無力で、存在するだけで迷惑をかけてしまう荷物となってしまうた。」

「ユーレニアは、リロニアの属国となってしまうだろう。私のせいだ。」

「ミウ様…こんな事態を引き起こしてしまった以上、私には責任があります。必ずミウ様を、ここからお連れ致します。」

「そんな、危険です！きつと、リユード王子が…」

「助けに来てくれる、筈だ。リユード様は、絶対に来てくれる。けれど、それを待っているだけで良いのか？」

「いいえ、我が身命に換えても、必ずミウ様を…」

「いつも私は待っているばかりで、それでは駄目だと、自分から動かなければと、願ってきた筈だ。シュレニアの王子がミアの婚約者になったと聞いた時、私は後悔の念にかられて夜も眠れなかったのに。また私は、何もせずに待っているつもりなのか？そんなのは、嫌だ。」

「待っているだけでは、駄目だ。自分で考え、どうしたら一番良いのか道を見つけ出さなければいけない。」

「もし私が王子だったら、どうするだろう？まず、私と連絡を取ろうとするのではないか？リユード王子は、とても聡明な方だ。たくさんさんの策を練り、どうしたら周りへ漏らさず、確実に私と連絡が取

れるのか。」

「メルノン、あなたにお願いがあるのです。」

私はメルノンの腕を引つ張って、立たせた。

「きっとリユード王子は、私と連絡をとる為に、何かの行動を起こしてくる筈です。もし誰かがあなたに接触してきたら、それを私へ伝えてくれますか？」

メルノンは、しっかりとうなずいた。

「もちろんです。どんなことでも漏らさず、お伝えします。」

王子よ、私はここで、やれるだけのことやってみます。自分自身の為に、国の為に、そしてあなたともう一度、会う為に。

第十一話

「ティアナ、方角はこっちで本当に合っているんだろっかね？」

国王たちを移送する際の騒ぎに紛れて、私とシユカは城を抜け出した。シユカは四聖人の中で紅一点の女性であり、私より二つ年上で、私と同じく独り身だ。エルライド様に人質をとられるようなものは何も無いし、荷物も持たずにそのまま城を出た。

そして今、リロニアから最も近い国、ロツズへ向かっている。その国で船を手に入れ、サング島へ向かう為だ。

「恐らくな。」

ロツズは距離的には近いのだが、険しい山を一つ越えなければならぬ。その為、国の交流も盛んでは無い。ロツズへ行く人々は、本来なら山を避け、大回りをして行く。

「馬でも走れない道だからね。」

切り立った崖の道ではない道を、走る。足を滑らせれば、真つ逆さまに谷底へ落ちていくだろう。

「雨が降っていないだけ良かった。それと、満月なのも幸いしたな。」

「だけど、さっさと抜けちまうよ。」

「ああ、わかっている。」

国王たちは今頃、海の上だろう。リロニアからサング島までは、半日かかる。到着するのはきつと、明け方だ。

ミウ様のことは、四聖人の一人であるルトに任せてきたから大丈夫だろう。彼も息子の口口を人質に取られていたとのことだったが、ミウ様のことは守ってくれると言った。それに、メルノンもいる。あの子は責任感が強いし、きつとミウ様の力になってくれる筈だ。

しかし、何故ミア王女はエルライド様の妻になったのだ。一体、何を手に入れたかったのか。

いくら考えても、わからない。地位や名声？そんなのは、ユーレニアにいても手に入った筈だ。それとただ、昔からの習性のように、『ミウ様の持っているもの』が欲しかっただけか…しかもそれが、ミア様の好きだったというリユード様だとすれば…

私たちはロツズへ着くと、船の中で寝ていた男と交渉して金を払い、船を出して貰った。

「あんたたちも奇特だね。サング島が見えたら、船から降りるなんて。」

男は舵を取りながら、言った。

「事情があつてな。私たちが降りたら、すぐロツズへ戻るように。怪しまれることは無いと思うが。」

「わかったよ。今は遠海に漁へ出ている船も多いし、怪しまれることは無いだろう。」

私はシユカへ向き直り、声を潜めて言った。一応、男が捕まった時に情報を知らされない為だ。

「島の北側に、地下の食糧貯蔵庫があるだろう。あそこは屋敷へつながっているが、もう一つの出入り口は、地上にも通じていたよな？」

「ああ。あたしもそこが良いと思っていた。あれを知っている者は少ないしね。」

「国王様たちが船に乗り込んでいく様子を見た限りでは、身の回りの世話をする者はいないようだった。いたのは見張り番の兵士だけだ。」

「となると、屋敷の周りを兵士に見張らせ、生活は三人だけでさせるようだね。」

私は、うなずいた。

「だから、中に入ってしまったらこっちのものだ。見張り番の奴らは屋敷の中へ入らないよう言われているかもしれないしな。」

「王子と接触しないようにかい？それも有り得るね。」

接触をすれば、気持ちが王子に傾いてしまうかもしれない。きっとエルライド様が最も恐れていることは、兵士たちの反乱だ。

「まずは、どうすればミウ様を救い出せるか、それを考えなければいけない。全ては、ミウ様をこちら側に引き戻せるかどうかにかか

っている。」

もしミウ様がエルライド様の手から抜け出せれば、ユーレニアが属国となることは避けられる。ユーレニアは屈強な兵士が多いし、戦力は強大だ。まだまとまっていないリロニアの軍が、例えば数では多いとしても、無理に攻め入ることは無いだろう。

見ると、空は白み始めていた。私はシュカと交替で、着くまで仮眠を取ることにした。

「まさかこんな形で、またここへ来るとはな。」

船に乗っている間、父上は一睡もしなかった。そのせいか、疲れきった表情をしている。母上もかなり疲れているらしく、今は別の部屋で休んでいる。

「リユードよ、そなた、ここまま終わるつもりではないだろうな？」

「もちろんです。王位は必ず、取り戻します。」

私は、窓から外の様子を眺めた。屋敷を囲う塀の外には、兵士が見張りをしている。しかし、それ程人数は多くない。船は私たちを降ろすすぐに引き返していったから、私たちが逃げ出すことへの危機感は少ないのだろう。

「ただ、問題は、ミウ様をどうやって連れ出すかです。危険な目に遭わせず、確実に連れ出す方法を考えなければ……」

「そうだな。だが、エルライドが、ミウ王女を傷つけることは無いだろう。そんなことをすれば、ユーレニアの軍勢が一気に攻めて来るからな。」

ユーレニアの強さは、ティアナが、『味方につけばこれ以上ない力になるが、敵に回したら恐ろしい』と言っていた程だ。迂闊にユーレニアを刺激することは無いだろう。

「エルライドは昔から頭の良い子供であった。お前も良かったが、理解力の早さはエルライドの方が上だったな。」

父上は、昔を懐かしむように目を細めた。私は、幼い頃の義兄を思い出した。いつも一人で、本を読んでいた。彼は私が嫌いなようで、私のいるところには近付こうとしなかった。

「しかし奴には、欠点がある。」

「欠点…？何ですか、それは？」

「あいつは孤独を好む。一人でいるのが好きな者は、決して大勢の人間を統率できない。何故なら、自分以外の心がわからないからだ。」

母は短い眠りから覚めると、井戸の様子を見に行く、と言った。食糧は外から運び込まれたが、水の確保をしておかなければいけない。私も一緒に見に行くことにした。

「我が国に、あの風習があつて良かったわ。『その苦勞を知らない

者は、その指示をしてはいけない』」

「おかげで、水の汲み方もわかりますね。」

私は井戸の蓋を開け、中の様子を見た。しっかりと蓋をしていたおかげか、異物も入っていないさそうだ。

「大丈夫みたいね。さて今日は、久々に私の手料理が食べられるわよ。リユード、地下の食糧庫にも何か残っているかもしれないから、見てきて。」

母が思ったより気落ちしていなさそうで、私はほっとした。

私は一旦屋敷の中へ戻り、ランプを手にとって、炊事場の横にある地下への階段を降りた。

何か、動く気配がした。

ネズミか？いや、嚴重に封鎖してあるから、そんなものは入り込まない筈だ。それ以外に考えられるとしたら、人。

兵士たちは、堀の中には入ってきていない。ただ、この地下倉庫は地上にも続いている。出口は雑草に紛れ、かなり分かり辛いが…知っている者がいるとすれば…

私は、記憶を巡らせた。私たち以外に知っている者は…

「ティアナ…？シユカ…？」

囁くように呼びかけると、木箱の横から、人影が浮かび上がった。

「さすが王子。我らの名前まで当ててしまつとは。」

ティアナとシュカが、そこにいた。私はまさか本当にいるとは思わなくて、嘆息した。

「二人とも…どうやってここまで…」

この二人の能力ならば、兵士に見つからずここまで辿りつくことは可能だろうが、問題はその前の段階だ。

「途中まで船で、それからは泳いできました。」

シュカが、平然とした表情で答えた。

「泳いで…!?この辺は波が荒いので有名だと…」

「我らにとっては大したことはありません。まあ何度か、流されかけましたが…」

ティアナも、平然と答えた。流されかけた、って結構危機的なことではないだろうか。

私たちは地下を出て、父上のもとへ行った。大層驚くだろうと思つたが、

「遅かつたな。」

と言っただけだった。

「父上：ティアナたちが来ると、予想していたのですか？」

「当たり前だ。私は、ティアナとシュカが生まれた時から知っているのだぞ。ここで来なければ、呪って出てやるところだった。」

「そう言われると思ひまして、来たのです。」

「まあ、座れ。お前たちも疲れただろう。」

ティアナとシュカは、父上と向かい合って座った。私は、ティアナの横に座った。

「ルトが来なかったということは、やはりあいつも、息子の口口を人質に取られていたか。」

「ええ。ですが、ミウ様の身を守ってもらうようには頼んできました。あちら側にはいますが、信用はできると思います。」

ティアナは言った。

「しかしこの分だと、家族がいる兵士たちは、人質に家族を取られるだろう。家族も無く、独り身だという兵士は、一体どれ位いるか……ティアナ、シュカ、覚えているか。」

すると、シュカが答えた。

「大体、三分の一程かと。」

この殆んどは、元々リロニアの者では無く、移民や難民だ。戦争で家族や国を失って、リロニアへ流れて来た。

私は、口を開いた。

「彼らとは何度か話したことがあります。元々彼らはリロニアの者ではありませんが、国王に対する畏敬の念は、他の兵士同様あるように感じられました。」

ティアナは、うなずいた。

「私もそのように思います。では、その者たちを足がかりにして、王位奪還の準備を整えていきましょう。彼らにこちらへ寝返らせる工作は、私たちが行います。」

四賢人は文武ともに優れた者たちであるが、本懐はこの工作にある。裏で動き、対象者から情報を収集したり、働きかけたりする。その手口は迅速で、鮮やかだ。

「その工作を終えるまで、どれ位かかる？」

「一ヶ月もあれば。」

父上は、満足げにうなずいた。

「では、行け。」

「はい。」

二人は立ち上がると、一礼し、部屋から出て行った。

「リユードよ、お前が一番心配なのは、ミウ王女のことだろう。」

私は、否定をしなかった。国のことも、ユーレニアのことも心配だったが、やはりミウ様のことが一番気にかかっていた。

「王位奪還の際には、ミウ王女が我らの元にいること、もしくは絶対安全の場所にいることが必須の条件だ。だから、連絡を取れる手段を考えるのだ。私も考えるが、老いた頭で良い案が思いつくかはわからんからな。」

「はい、ありがとうございます。何とか考え出してみます。」

ミウ様は今、どれだけ不安な思いでいることだろう。早くその不安を取り除いてあげたいものだが、少し時間がかかるかもしれないな。

けれど必ず、やり遂げてみせる。もう一度、あなたと会う為に。

第十二話

エルライド様の戴冠式が行われた。私は出席するよう言われ、メルノンと共に出席をした。本当ならば出席などしたくなかったのだが、そうしないとメルノンが何かされるような気がして、私は大人しく出席をした。

場所は、玉座の間で、出席しているのは十名ほど。元国王様の側でお仕えしていた者たちが多かったが、見たことのない人もいた。

「第二十五代リロニア王、エルライドに王の証を授ける。」

エルライド様の頭に、金色の、装飾品が何もついていない王冠が載せられた。リロニアでは、王の持ち物となるものには、装飾品が凝らされていない。代々、そういう風習なのだ、以前リュード様は言った。

私はそれとなく、ミアの姿を探したが、どこにもいなかった。

ミアは、ここへ来た理由が、欲しいものを手に入れる為、と言った。その欲しいものとは、やはりリュード様のことなのだろうか。でもそれならば何故、リュード様を追い込むようなことをしたのか？

「ミウ様、エルライド様がここへ残るようにと。メルノンは、廊下で待機だ。」

先ほど、エルライド様に王冠を渡した側近の方が、私に言った。

私一人だけがその場へ残り、他の者たちは玉座の間から出て行った。

「ミウ王女よ、こちらへ。」

私はエルライド様に近付いた。

「そなた、私の側室にしてやっても良いぞ。」

「え…!？」

私は驚いたのと同時に怖くなって、後ずさりした。

「もしそなたが私と婚姻関係を結べば、城を自由に歩きまわれるようにしてやっても良い。」

「ですが…あなたはミアと結婚を…」

「あいつとは、利害が一致したから婚姻関係を結んだだけで、ただの契約だ。」

「利害…? 一体どんな…」

「知りたければ、私の妻になることだ。」

私は、首を横に振った。

「…妻には、なりません。私の婚約者は、リユード様だけです。」

「二度と会えぬ男を、いつまでも想い続ける気か？」

「二度と会えないなんて、思っていません。」

「あいつはそなたと会わずに、死んでいく。あの島から出ることもなく。」

「そんなことはありません！いつか絶対に、また会えます！」

会える確証なんて、全く無い。けれど私は感じるのだ。また絶対に会える、と。そしてそう信じたい。信じることで、私は強く生きられる気がする。

「では、そなたの目の前で、リユードの首を刎ねてやろう。」

私は両手を握り締め、何も言わずに玉座の間から出た。そこではメルノンが待っていて、私の顔を見ると、心配そうな表情を浮かべた。

「ミウ様……」

「大丈夫です。部屋に戻りましょう。」

私は深呼吸をして、歩き出した。弱い心を見せてはいけない。周りの者を不安にさせるだけだ。

ミアとエルライド様の利害が一致したとは、一体どういうことなのだろう。エルライド様は王位が欲しくて、ミアはリユード様が欲しかった……？

王位を奪い、リユード様と私の関係を切らせて、ミアがリユード様を……

私は、頭の中の嫌な考えを払った。例えミアがリユード様を好きだったとしても、リユード様は決してミアに傾いたりしない。

私は、願うように、そう信じた。

戴冠式から二日経った日、サング島から戻ってきた船の荷物の中に、一通の手紙が紛れているのを、兵士が発見した。

「なんだ、これ…?」

兵士は差出人を見ると、ロロ・メドウスと書かれてあった。

「ロロの手紙…?なんだってこんなものが…」

手紙には封がされておらず、兵士は興味を駆られて中身を見た。

「うわ、あいつ、やるなあ…」

兵士は手紙を手に持ち、メルノンの元へ向かった。

「ここから先、一般兵は立ち入り禁止です。」

後宮にはミウ様がいるので、厳重に封鎖されている。見張りの兵の数も以前に比べて二倍になった。

「わかっている。これをメルノンに渡してくれるか。」

「何ですか、これは？」

「ロロからメルノンへの恋文だ。何故か荷物に紛れていたんだよ。ロロに戻すのも悪いから、届けてくれないか。」

見張りの兵は、その手紙を受け取った。

「わかりました。では、届けておきます。」

ドアをノックする音が聞こえた。私は思わず、メルノンと顔を見合わせた。まだ食事の時間では無いし、それ以外にこの部屋を訪れる者など、いない筈だ。

「メルノン、あなたに手紙が届いています。」

メルノンは立ち上がり、部屋のドアを開けた。そこにはいつも見張り番をしている兵がいて、メルノンに手紙を渡した。

「恋文のようです。あなたに届けてくれと言われましたので。では。」

メルノンはドアを閉めて、私の元へ来た。

「ロロ…一体、何を考えているのかしら？」

「ああ、ロロ・メドウス…四賢人のルトの息子さんですね。彼があなたに？」

そう私がたずねると、メルノンはい少し照れたような、怒ったような表情をしながらうなずいた。

「あれ…便箋がもう一枚…」

メルノンは小さく折り畳まれた便箋を出し、開いた。

「これ…リユード様からの手紙です！」

私はメルノンからそれを受け取ると、手紙を読んだ。

『ミウ様へ

毎日不安な日々を過ごされているだろうと思いますが、この手紙で少しでもあなたの気持ちを軽くすることが出来れば、幸いです。

こちらの方は、皆元気です。三人だけの生活で、戸惑う事もありますが、平穏な日々を過ごしています。

ただ私は、あなたの事がとても心配です。優しく、皆の事を気遣うあなたでしょうから、きっと自分のことを責めているのではないかと思うのです。

今回このような事が起こったのは、誰のせいでもありません。だからどうか、決してご自分を責めたりしないよう。

それから、ロロとメルノンには謝っておいてくれますでしょうか。あのラブレターは、私が書いたものです。誤解をさせてしまってます

まなかつた、と伝えておいて下さい。ただ、この手紙をあなたへ届ける為には、この方法しかありませんでした。

早くあなたに会えるよう、最善を尽くします。どうかそれまでお体に気をつけて過ごされますよう。

リユード・ゼノキア』

私はその手紙を読み終えると、光が胸の中に宿ったような気がした。私は顔を上げて、メルノンに言った。

「その恋文は、王子が書いたものだそうです。ロロからメルノンへ手紙を渡したと見せかける為に。」

するとメルノンは、納得したような表情を浮かべた。

「そうだと思いました。だってロロ、こんなに字が綺麗じゃないんですもの。」

私はその言葉に、思わず笑ってしまった。

「王子は、無事であるか?」

「ええ。国王様も王妃様も、元気です。」

大丈夫、何とかなる。手紙を見ていると、私はそんな気がしてきた。

いつも私は、あなたの欲しかったものを手に入れてきた。だから今度も、そうじゃないと気が済まない。あなたが幸せになる姿なんて、私は絶対に見たくないのよ。

「ミア様、間もなくサング島に到着します。」

私は、窓から外の様子を見るのをやめて、仕度を整えた。

ああどうして、あなたの好きなものを奪うのは、こんなに楽しいんだろう。可哀想なミア。シュレニアの王子も、あなたの居場所も、リュード王子も、全部私のもの。

この王子を奪ったら、あなたはどんな顔をするかしら？ またいつもみたいに、何も感じていない振りをして、一人泣くのかしら？

私は、あなたとは違うわ。いつもいつも自分から好きなものが言えず、与えられるのを待っているだけのアなたとは、違う。

綺麗な蒼い瞳。遅しくて大きい体。あの女には、勿体無いわ。

私は、王子へ向かって手を伸ばした。

第十三話

リユード様からの手紙は、次の週にも来た。

手紙には、毎日の生活の様子が詳細に記されていた。また最後には、『準備を整えている』という言葉があった。

「三人とも、元気なら何よりですね。」

メルノンは、嬉しそうに言った。

「そうですね。三人だけで生活できるっていうのも、すごいけれど。」

身の回りの世話をする者たちがいないのに、王族の方だけで良く生活を営めるものだ。私だったら、慣れるまで一ヶ月はかかるだろうな。

私が便箋を折りたたみ、封筒の中へしまおうとした時、突然、ミアが部屋に入ってきた。その後ろから兵がミアの腕を掴んで止めようとしていたが、ミアは構わず私の元へ来た。

私は慌てて、手紙を自分の背中に隠した。

「ミア様！ミウ様とは誰も接触してはいけないと、エルライド様が……！」

兵士は、泣きそうな顔で、叫ぶように言った。

「うるさいわね！私はエルライドの妻なのよ！」

ミアは私の前に立つと、私が背中に隠した手紙を引っ張り出そうとした。

「ミア…やめてよ！」

「誰からの手紙！？見せなさいよ！」

その時、手紙は音を立てて破けた。ミアは破れた紙をかざした。

「…ふーん…リユード王子からの手紙ね…？」

ミアは破れた紙を私に投げ捨てると、口の端を歪めた。

「あの王子も大変ね。あんたのご機嫌取りもしなくちゃいけないくて。」

私はミアと視線を合わさずに、破れた紙を小さく丸めた。私のせいで、手紙のことがミアにわかってしまった。もしこれがエルライド様に伝わったら…

「ねえミア、私、王子と寝たのよ。」

私は顔を上げて、ミアの顔を見た。王子が、ミアと？そんなこと…

「王子、私の方が好きだったんだって。あんたと婚約したのは、国の為に仕方なく、って。」

「嘘！そんなの…」

「あんたみたいなの、うじうじして消極的な女は嫌いなんだって。そりゃ、そうよね。あんたみたいなの、好きになる人なんて誰もいないわ。」

そう言つと、ミアは、部屋から出て行つた。私は、掌の中で手紙を握り締めた。

「ミウ様…あの、お気になさらない方がいいと思います。王子があなたの方と…そんなこと、有り得ません。」

私は、うなずいた。

「大丈夫です。わかっています。」

王子がミアと…なんて、絶対に無い。けれど…どうしてこんなに不安なんだろう？今までミアは、私の欲しかったものを全部手に入れてきた。

そっか…だから私は、不安なんだ。ミアがまた、私のものを取っちゃうんじゃないかって。

その日の午後、私はエルライド様呼び出された。エルライド様の傍らには、ミアが立っていた。

「リユードから手紙を受け取っていたと？」

私は黙つたまま、下を向いていた。リユード様からの手紙は、—

応二通とも燃やして処分した。

「そうか…肉親としての情はかけてやったのだがな…こうなれば仕方ない、あの三人を処刑する。」

「そんな…！」

私のせいだ。私が不用意に手紙を読んでいたから…

「お願いします…！やめて下さい…お願いします…！」

私は、頭を下げた。しかしエルライド様からの返答は無く、沈黙が続いた。

私は後悔と自責の念に駆られ、涙が溢れてきた。そして、頭を下げながら、涙が絨毯に落ちてしみを作る様をただ見ているしかなかった。

「…わかった。」

エルライド様の声がかかり、私は顔を上げた。

「命だけは、助けてやろう。だが一つ、条件がある。」

私はほっと、胸を撫で下ろした。

「私と結婚することだ。」

「えっ…！？」

その声を上げたのは、ミアだった。しかしそれに構うことなく、エルライド様は言った。

「式は三日後だ。それ以外に、リユードたちを助ける術は無い。」

エルライド様と結婚すること以外、道は無い…いや、私に選択肢なんて無いんだ。

「…わかりました。」

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

ミアが甲高い声を張り上げた。

「ミウを妻にする、って一体どういう…」

「ミウよ、部屋に戻れ。」

私は言われた通り、その部屋を出て自分の部屋へ向かった。

例え結婚をしたって、リユード様が来るまでの辛抱だ。それまで耐えるのが、私の役目なのだ。だから泣くな。不安そうな顔をするな。私は誰よりも、気丈でいなければいけない。

彼女と初めて会ったのは、昨年の王の誕生会の時だった。その姿を見かけることはあったが、リユードの婚約者ということと、顔を合わせようと思わなかった。

王の誕生会の時には、後宮から人が殆んどいなくなる。私はそんな時しか気兼ねなく散歩できないので、その日も一人、車椅子で好きなように移動していた。

しかしその時、車椅子の片方の車輪が、中庭と廊下のある溝にはまってしまった。

「どうかしましたか？」

後ろから声がかかり、振り向くと、リユードの婚約者が立っていた。

私が黙って答えずにいると、彼女は、「ああ。」と気付いて、車椅子を溝から引っ張ってくれた。

「大丈夫ですか？私が部屋までお送りしましょうか？」

「…いや、いい。そなた、名前は？」

「申し遅れました、私はミウ・シグナと申します。あの、失礼ながら、あなたのお名前は？」

「私は、エルライド・ゼノキアだ。」

「では、リユード様の兄上の…ご挨拶が遅くなってしまって、申し訳ありません。」

彼女は、深く礼をした。

「…今日は、国王の誕生会には出席しないのか？」

「ええ、ああいう場が苦手なものですから…エルライド様は、ご出席なさらないのですか？」

「ああ、私もああいう場は苦手だからな。」

出るだけで、好奇の視線にさらされる。私はそんなものを、もう見たくない。

「では、私と一緒にですね。」

そう言うと、彼女は微笑んだ。その笑みが夜空の満月よりも眩しくて、私は、心が熱くなったのを感じた。

私はずっと、あなたが欲しかった。

何故、彼女はリユードのものになったのか。それもこれも、私の足が悪く、母が側室だったからだ。

リユードと私の立場が逆だったら、と何度も願った。だがそんなことは、起こり得ないのだ。

だから私は、あの手段に出た。そうしなければ、私の望むものは手に入らないと悟ったからだ。

私は、王になった。私自身の力で。そして望むものも、ようやく手に入った。

城の入り口から空へ突き出す『英雄の道』。眼下に国を見下ろすことができ、その道の先端で代々結婚式が執り行われる。

私はその先端で待ち、花嫁がこちらへ歩いてくる様子を眺めていた。純白の衣装を身にまとい、花を両手に持って、ゆっくりと進む。

『リユード、最後に私へ言う事は無いか？』

リユードたちが船へ乗り込む間際、私はそうたずねた。

『これで、私に勝ったなどと思わないよう。』

私は、唇を歪めた。

しかし、どうだ、リユード。彼女を手に入れたのは、私だったろう。

第十四話

抜けるような青空。前はこの空がとても好きだったのに、今は眩しくて、見たくない。

『英雄の道』の先端で、エルライド様が待っている。

結局私は、何も出来なかった。自分から動いて、リユード様の方になることも。それどころか、自分の失敗で、エルライド様の妻になってしまった。

これから先、更に監視の目は厳しくなるだろう。メルノンとエルライド様以外の人と接触することすら難しくなる。逃げ出すことなんて、恐らく無理だ。

私はどうして、いつもこうなのだ。誰かの役に立ちたいと考えながらも、結局そうできず、更には迷惑をかけてしまう。

いつそのこと、私なんて、いなくなれば…

そう思った瞬間、私の体は浮き上がった。大きな体の男性に、私は担ぎ上げられた。

その男性は走り出し、そのまわりに、メルノン、ロロ、ルト殿が集まった。

「ミウ様、失礼します！」

メルバ殿の声だ。私を担いでいたのは、メルバ殿だったのか。と

思った瞬間、メルバ殿の体が空を飛び、着地と共に大きな衝撃が伝わってきた。

そこでようやく、私は状況を飲み込めた。彼らは、私を逃がそうとしてくれている。

他の三人も階段を駆け下りながら、兵士たちの体を飛び越えてきた。

「メルバ、ここを真っ直ぐ走れ！私とロロは、兵士を止める！」

ルト様が言い、槍を兵士たちに向けた。

「どうかご無事で！」

ロロは言いながら、槍を抜いた。

「わかった！行くぞ、メルノン！」

「はい！」

メルバ殿とメルノンは、走り続けた。遠くの方で、私たちを追ってくる兵士の姿が見える。

ある時メルバ殿は足を止め、私を降ろした。

「私はここで門番兵と戦い、引き付ける。その間にお前はミウ様を連れて、逃げる。ミウ様：我がリロニアと、あなたの祖国ユーレーニアの為、無事に逃げ延びて下さい。」

メルバ殿は剣を抜くと、門番兵に向かって走り出した。

「ミウ様、参りましょう！」

私はメルノンに強く手を引かれながら、門を出た。

だいぶ走り続け、息が上がり、足が絡まるように崩れた。メルノンは私の手を離すと、自分の着ている衣服を脱ぎ始めた。

「ミウ様、服を交換しましょう。私がミウ様の振りをして、かく乱します。」

「そんな…それでは、あなたが捕まった時、あなたは…」

「ミウ様！今はそんなことを心配している場合ではありません！あなたがユーレニアへ逃げ延びねば、もっと大きな被害を出してしまうかもしれないのです！」

メルノンは、無理やり私の服を脱がした。

「あの王では、リロニアを統治できません。このままでは人民の心は離れ、国は衰退していくでしょう。私はそんな祖国を、見たくないので。だからお願いです、ミウ様。私たちの為に、どうかユーレニアへ…そして、リユード王子と共に、リロニアへ戻ってきて下さい…」

「でも…」

「ミウ様！」

メルノンは、強い眼差しを私に向けた。

ここで私が行かなければ、全て無駄になってしまう。彼らの想いを成し遂げる為、私は、行かなくてはならない。

私は、メルノンの服に袖を通し、彼女の手を強く握り締めた。

「必ず、戻ります。だからそれまで、待っていて下さい。」

メルノンは、しっかりとうなずいた。

私は、ユーレニアへ続く道を駆け出した。

-
-
-

「ミウ様が、エルライドと結婚を…!？」

「ええ。式は、二日後だと…」

こちらへ寝返った兵士の一人は、そう答えた。

「二日後!？」

「マズいな…まだ工作も完了していないというのに…」

シユカが、つぶやく様に言った。

なぜ突然、エルライドはミウ様と結婚を決めたのだろう。妻として手元に置き、より監視を強める為？となると、私の出した手紙が発見されたか。

しかし、ただの『監視』ならば、わざわざ妻にする必要など無い。まさかエルライドは、ミウ様のことを…

私はその時、昨年の王の誕生会での出来事を思い出した。その日、私は王に挨拶を済ませると、足早に退出してミウ様を探した。

その時、ミウ様はエルライドと共にいた。何を話していたか詳しく聞かなかったが…エルライドが側近以外の人間といることは、珍しかった。

もしかするとエルライドは、ミウ様に好意を寄せていたのではないか？

「しかしこれは、好機かもしれませんよ、王子。式時には、警備の手が緩む筈です。」

ティアナが言った。

確かに、厳重な警備がされた後宮からミウ様が出るのは、その時しか無さそうだ。

「そうか…わかった。では明日、式の際にミウ様を取り戻す。すまないが、このことをルトに伝えておいてくれるか。彼ならば、その段取りを上手く考えてくれるだろう。」

すると兵士は、うなずいた。

「はい、確かに伝えておきます。」

「船は、リロニアの北にある漁村、コルズへつけて、私たちを降ろした後、リロニアへ向かってくれ。私とティアナ、シユカは、コルズで馬を得て、ユーレニアへ向かう。」

「私たちは、ユーレニアでミウ様が来るのを、待つのですね？」

「いや、ティアナ、私とお前は、ユーレニアの兵を借りてロツズまで南下する。」

「ロツズまで…何故ですか？」

「ミウ様がユーレニアの手に戻ったと知れば、エルライドは、強硬的にユーレニアを手に入れようとしてくるかもしれない。勿論その時、ユーレニアは戦うだろう。ユーレニアの戦力は高く、リロニアが押されるのは必至だ。そして、街が戦地となる可能性もある。それを避ける為と、私たちがリロニア軍に遭遇しない為、ユーレニア軍には、二国間の草原までリロニア軍を引き付けてもらう。」

「では、引き付けている間、我らはロツズからリロニアへ向かうのですか？」

「そうだ。誰もあの山岳地帯から攻め込むとは考えていないだろう。」

すると、ティアナは珍しく顔を引きつらせた。

「王子、あの山は、馬の走れない場所です！」

「誰か、あの山を馬で走ったことがあるのか？」

ティアナは黙って、首を横に振った。

「人が走れるならば、馬でも走れるかもしれない。では早速、ここを発つ。」

私は立ち上がり、部屋を出た。

私たちは夜遅くにコルズへ着き、そこからユーレニアへ向かった。馬を時々休ませながら、それでも一睡もせずユーレニアへ着いたのは、明け方だった。

「リユード王子：待っておりました、あなたが来るのを。」

ユーレニア国王は、以前と比べてかなり痩せていた。顔は土気色で、かなり疲労が溜まっているようだった。

「ユーレニア国王、迎え入れて頂いたこと、感謝しております。それで早速なのですが、五十名程、兵を貸して頂きたい。出来れば、戦い慣れしている者を…」

「兵を？まさかそれだけで、リロニアへ攻め込むつもりでは…」

「ええ、そうです。けれど、リロニアへ攻め込むのは、ユーレニア軍がリロニア軍を引きつけている時です。ミウ様がこちらに戻った

と知ったエルライドは、ユーレニアへ軍を向ける可能性が高いでしょう。その時、国王様には、リロニア軍をできるだけリロニアから離して、引き込んで欲しいのです。」

「なるほど…しかしそれだけの兵で…」

「あまり多いと、見つかる可能性があります。それから、リロニアでは明日、ミウ様とエルライドの結婚式が行われます。」

「結婚式だと！？そんなことは、聞いておらん…」

「急遽決まったようです。ですが、我らの仲間はその式の際に、ミウ様をお連れする予定です。うまく連れ出すことが出来れば、ミウ様はユーレニアへ向かってきます。シユカ、お前は明日、国境付近に滞在している兵士を倒し、ミウ様が来るのを見張っていてくれるか。」

「了解しました。」

シユカは、私にうなずいた。

いよいよ、動き出す時が来た。これが失敗すれば、私はミウ様を失い、そして国は疲弊していくだろう。あの王は、政治の如何を知っているかもしれないが、人の動かし方を知っていない。

民の生活が脅かされること。それは私の命をかけてでも、阻止しなければならぬことだ。

義兄上よ。あなたはあの日、言ったな。

『勝ったなどと思わないよう？私は王になるべくして、なったのだ』
と。

ならば、せめて最後まで責任を持って民の命を守れ。私は明日、あなたのもとへ攻め行く。攻め来る者に対し、民を優先して守る。それが出来ぬ者は、王の器ではない。

第十五話

足が、震えている。筋肉は硬直し、鉛のように重くて、痛くて、それでも私は足を動かした。ここで止まったら、二度と走れない気がした。

メルノンには、無事だろうか。ルト殿や、ロロや、メルバ殿は…みんな、私の為に…だから私は、こんなところで止まってはいけないんだ。

後ろの方で、かすかに声が聞こえたような気がした。振り向いて見ると、リロニアの兵士服を着た男が遠くの方に見えた。

私は、走る速度を上げた。足がもつれ、何度も転んだが、起き上がってまた走った。喉がひゅうひゅうと鳴り、目の前は霞んでいた。それでも私の足は、止まらなかった。

ある時、私は石につまずき、地面に激しく体を打ちつけてしまった。腕で体を支え、起き上がると、目の前に女の人があった。

一瞬、どきっとしたが…この人は、四賢人の一人、シユカさんだ。

「ミウ様、よくぞここまで辿り着きました。」

シユカさんは軽々と私の体を担ぐと、私を馬に乗せた。そして私の後ろに乗り、手綱を握った。

「ユーニレアへ向かいます。お父様もお母様も、あなたを待っていますよ。」

そう言うと、シユカさんは馬を走らせた。私は安堵感で、顔を覆って泣いた。背中にある温もりが、嬉しかった。

ユーレニアでは、お父様とお母様が、私を出迎えてくれた。

「よくぞ戻ってきた、ミウよ。」

「あなたが無事で、本当に良かった。」

私は、二人と抱き合った。けれど再会を喜んでばかりはいられない。メルノンたちのことが心配で、私はすぐにでも助けに行きたかった。

「今は、リユード様が王位を奪還されるべく、ロツズからリロニアへ兵を進めています。きつとリユード様が、メルノンたちを助けてくれますよ。」

シユカさんは、そう言った。

その時、一人の兵士が走ってやって来た。

「国王様、ご報告致します！リロニアから使者がやって来て、『ミウ様を引き渡さねば攻撃を仕掛ける』と。」

「思ったより早かったな。その使者へ、伝えよ。『望むところだ』と。」

「お父様：リロニアと、戦争を!？」

「リユード様がエルライドを討つまで、軍勢を引き付けておくだけだ。被害は最小限に食い止める。とりあえずお前は、少し休んで…」

「私も行きます!一緒にいかせて下さい!」

「ミウ!」

お母様が、声を上げた。

「そんな体で、あちこち怪我もしているのに…」

「でも、いてもたってもいられないんです!皆、私を逃がす為に命を懸けてくれた…だから私一人だけ、休んでいるわけにはいきません!」

するとお父様は、私の肩に手を置いた。

「わかった。では、行こう。」

リロニア軍は、国境線を越えて、進軍してきた。それに対し、ユ
ーレニア軍は、一列に並んで盾を構えている。

「お父様、お願いします。私にリロニアの兵士たちと、話をさせてくれませんか。」

「しかし、お前が…もしリロニア軍の兵士たちが、お前を捕まえよ

うと突進してきたらどうするのだ。」

「大丈夫です、ユーレニア軍からは、離れません。」

「私もお側について参ります。」

シユカさんが言い、私はうなずいた。

「わかった。好きなようにするが良い。」

「ありがとうございます。」

大嵐の時の波のように、だんだんと、しかし確実に、リロニア軍が前進してくる。

「シユカさん、ユーレニア軍の前に出てくれますか？」

私とシユカさんの乗った馬は、ユーレニアの軍勢の前に出た。私は馬から降りたが、疲労で足が震え立っていられず、膝を折った。

「ミウ様、お掴まり下さい。」

私はシユカさんの腕に掴まって、リロニア軍が近付いてくるのを待った。そして彼らの姿がはっきりと見えた時、緊張感が一気に高まった。

「リロニアの兵士たちよ！」

私は、自分の持っている最大限の音量を振り絞った。

「どうか…どうか、私の話を聞いて下さい！」

進軍が、止まった。私は、続けて言った。

「私たちが争う理由は、何も無いのです！誰も、この戦いを望んでなんかいません！お互い…自分の国を愛して、守るべきものがあって…けれど、今大切なことは、互いに協力し合うことです！」

沈黙が、あたりを包んでいた。リロニアの人たちは、私の言葉を聞いてくれているようだった。

「リユード様は今、リロニアを守る為に、戦おうとしています！だから…お願いします！」

私はシユカさんから手を離すと、膝を折り、両手を地面についた。

「どうか、リユード様の力になって下さい！お願いします！」

私は、頭を地につけた。ざわついた声が聞こえたが、私は頭を上げず、誰も私の頭を上げさせようとしなかった。

その時、一つの声が上がった。

「協力致します！」

その声は、リロニア軍の方から聞こえてきた。そしてまた、声が上がった。

「私も協力します！」

私は顔を上げて、次々と声を上げていく兵士たちを見つめた。すると、ある兵士がこちらへ馬を走らせてくるのを見つけた。

その兵士は馬から降りると、私のもとへ歩み寄った。後ろで剣を構える音がしたが、私はその兵士から差し出された手に掴まった。

「兵士長のアルバトと申します。ミウ様、共に帰りましょう。我らの愛する、リロニアへ。」

私は、しっかりとうなずいた。その時、お父様が私たちのもとへやって来て、言った。

「アルバト殿よ。我らユーレニアも、大切な同盟国の為、力を貸そう。そなたらの軍について行く。」

アルバト殿は、兵を指揮して、リロニアへ向かわせた。その後ろから、ユーレニアの軍勢も続き、私はシュカさんと共に、リロニアへ向かった。

「城の西門、突破されました！城内へ侵入したとのことですよ！」

私は苛立ちを静めるように、手元にあった扇子をその兵士に投げつけた。

「何をしているのだ！たった五十名程の軍勢なのだろう！」

「そ、それが…突然、山岳地帯から現れたかと思うと、一気に…」

「言い訳など聞きたくない！早く、リユードを止めよ！殺すのだ！」
兵士は私に一礼すると、部屋から出て行った。

忌まわしい奴め。やはりあの時、消しておけば良かった。でなければ、こんな事には…

「国王！ご報告が！」

「何だ、また…」

「内乱が起きています！寝返る兵士が続出し…」

「見せしめに、その家族を殺せ！」

「そ、それと…ユーレニア征服へ向かった軍と、ユーレニア軍が共に、こちらへ進軍してきているとの情報が…」

「なんだと…！？」

リロニアと、ユーレニアの両軍が結託したのか…？何故…

「王、ご決断なさいませ。」

私の傍らに立っていた側近が、言った。

「こつなれば、あなたに勝ち目はありません。せめて誇りを持って、ご自害なされるか…」

「ふざけたことを言うな！私が自害など…」

「それでは剣を持ち、戦うのです。」

「戦う…だと？私が剣を持って戦える筈が、無いだろう！」

「でなければ誇りも持たず、死するのみです。」

「私は…私は、死なん！」

車椅子を走らせ、私は部屋を出た。私が、死ぬ筈などない。私はこの国の王だ。

「おい、あつちにエルライドがいるぞ！」

何故だ。何故、私を裏切る。何故、誰も私の味方になってくれない。

「生け捕りにしろとのリユード様のご命令だ！捕まえる！」

何故、あいつなのだ。何故、私ではないのだ。

誰か、誰か教えてくれ。何故私のまわりには、人がいなかったのだ。何故皆、私の元から離れていくのだ。

その時、私は段差につまずき、車椅子もろとも前に転がった。私に近付いてくる足音が聞こえ、私は必死に起き上がった。

「リユード様、あとはエルライドと、ミア王女を探すのみです。」

ティアナが言った。城にいた兵士の殆んどは、私の方へ寝返った。あとは、エルライドとミア王女を捕えるだけだ。

「リユード様！エルライドが見つかったとの情報が…」

「わかった、すぐそちらへ向かおう。」

「それから、リロニアとユーレニアの軍が、こちらへ向かっているとのことですよ。」

「二つの軍が？」

ということとは、ミウ様が無事にユーレニアへ到達したということか。そして、誰かが、二つの軍を和解させてくれた。誰のおかげかはわからないが、争いが無かったのならば、それはとても良い事だ。

私はティアナとともに、エルライドのいる場所へと向かった。

彼は体を縄で縛られ、唇を噛み締めていた。捕えられる時に暴れたのか、顔が赤く腫れている。

「エルライドよ、選ぶが良い。生きて浄罪をするか、自らを罰し、死を取るか。」

私は剣を抜き、その刃先をエルライドへ向けた。

「死ぬ勇気が無いのならば、私が葬ってやる。さあ、選べ。」

エルライドは、震えていた。そして両目からは、涙が零れ始めた。

「私が…私が何をしたというのだ！浄罪だと？これは、私の罪では無い！私をこんな風にした、お前らが悪い…」

その瞬間、エルライドの首に一筋の赤い線が走った。血が噴き出し、エルライドは、人形のように倒れていった。

ティアナは、剣を鞘に収めた。

「あなたが手を下すまでもありません。」

私も剣を鞘に収め、

「遺体は、共同墓地へ埋葬してくれ。」

と兵士に指示した。この者を王家の墓に入れることは、私が許さない。

「リユード様！ユーレニア国王とミウ様が、到着なさいました！」

「そうか…今、どこにいる？」

「城の正門にいるということです。」

「リユード様、先にミウ様へお顔を見せてきて下さい。私たちは、引き続きミア王女の捜索にあたります。」

「わかった、ありがとう。」

私は、正門へ向けて走った。

第十六話

城の門は多少崩れ、戦いのあとが見られたが、中はいつもと変わりがなかった。聞くと、エルライド様についた兵士たちの殆んどは、リユード様へ寝返つたらしい。私はそれを聞いて、リユード様が無事だということがわかり、安心した。

「ミウ様！」

懐かしい声が、聞こえた。

「リユード様！」

私は、走ってきたリユード様と、抱き合つた。その腕の中は変わらず温かくて、私は泣きそうになつたのを必死で堪えた。

「ご無事で何よりです、ミウ様。」

リユード様は私を離すと、微笑んだ。久しぶりに見たリユード様は、髪が少し伸び、背も少し高くなつたように見えた。

その時私は、メルノンたちのことを思い出した。

「そつだ、リユード様…私を逃がす為に、メルノンたちが…」

「大丈夫です。地下牢に全員繋がれてはいましたが、無事でした。」
それを聞いて、私は心の底から安堵した。

その時、一人の兵士が城内から走ってやって来た。

「ミア王女が見つかりました！」

私は、リユード様と顔を見合わせた。

「私も行って、宜しいか。」

お父様がそう言つと、リユード様はうなずいた。

「ええ。では、行きましょう。」

ミアは、私の部屋のバルコニーの隅に隠れていた。そこは、バルコニーに出てみなければわからない場所であったが、外を探索していた兵士に見つかったようだ。

ミアは泣き叫びながら、許しを請いた。もう二度とこんなことはしない、だから命だけは助けて、と。

するとお父様は、リユード様に頭を下げた。

「リユード様…お願いします。こいつは馬鹿な娘ですが、ミアもミウも、私にとってはかけがえのない家族です。どうか…どうか、命だけは助けてやってくれませんか。二度とこの地を踏ませないようにし、厳重にこちらで監視します。」

「…ミウ様は、どのように考えていますか？」

私はリユード様にたずねられ、ミアの顔を見た。ミアは泣き腫らした目で、懇願するように私を見ている。

「私からも…お願いします。どうかミアの命だけは、助けてください。」

リユード様は、しっかりとうなずいた。

「わかりました。では、ユーレニア国王よ。ミア王女を連れ、祖国へ戻って頂けますね？」

「勿論です！ありがとうございます！」

それから私とミアは、彼女が病で死ぬ時まで、一度も会うことは無かった。

城の壊れた箇所は一週間で修復され、また以前のように平穏な日々が戻ってきた。怪我をした人は数人、死人は一人だけだった。

元国王、エルライド様。どのように亡くなったのかは、詳しく聞かなかつたけれど、私は彼の遺体が埋葬された共同墓地へ赴いた。

国王の座を手に入れたけれど、リロニアを混乱に陥れた罪は重く、共同墓地へ入れられることになった。それがどんなに不名誉なことであるか、私にも良くわかっていた。

私は花を手向け、祈った。そして顔を上げた時、後ろから声がかかった。

「ミウ様は、お優しいですね。」

振り向くと、リユード王子がいた。

「そんな、優しくなんて…でも私…エルライド様のことは良くわからなかったけれど…私と似ているな、って感じたんです。」

「ミウ様と…？」

「私は、ミアが羨ましくて、仕方ありませんでした。ミアと立場が逆だったら、って、何度も願いました。この方も、リユード様と自分の立場を変えられたら、って願っていたような気がするんです。」

「そう…かもしれませぬね。」

「でも、私は気付いたんです。無理に『ミアになる』必要は無い。自分が必要としてくれる人たちのために、自分ができることを考えて、やっていけばいいって…この方も、もしそう気付いていけば…このようなことは起きなかつたかもしれませぬね。」

するとリユード様は、私の体をマントの中に入れて肩を抱いた。

「行きましょう、風が冷たくなってきました。」

私とリユード様は、歩き出した。夕暮れの空は、太陽がまだ鮮烈な光を放っていた。

その一週間後、リユード王子の即位式が行われた。王は復位せず、王子が王位を継ぐことになった。

「第二十五代、リロニア国王、リユード・ゼノキアに王の証を授ける。」

エルライド様は、その王位を剥奪されたので、リユード様は二十五代目の王となった。

ひざまづいた新国王の頭に、前国王から王冠をかぶせられる。その瞬間、拍手と歓声が起こった。

私も拍手をしながら、新国王を見た。その姿は凛々しく、悠然としていた。

「惚れ直しましたか？」

私の隣にティアナが来て、言った。

「ティアナ…何を…」

「次の祝典は、お二人の結婚ですかね？」

「もう…そ、そんなことより、ティアナこそどうなんですか？そろそろ結婚をしないと…」

私は慌てて、話題を変えた。

皆、私とリユード様の結婚を待ち望んでいる、ということとは良く

わかる。けれどリユード様は優しい方だから、私からそういう気持ちになるのを待っていてくれるのだろう。今はそれに甘えてしまっているけれど…私は、リユード様のことを…

すると、シユカさんが私たちのもとへ来て言った。

「女装癖のあるこいつが、まともに結婚できる筈ありませんよ。」

「シユカ…男の格好をして、そこらの男より遅いお前には言われたくないな。少しは女らしくしたらどうだ。」

「あたしが女らしくしても、気持ち悪いだけだろ？」

私はその二人の言葉に、声をあげて笑ってしまった。

「では、二人が結婚したら、丁度良いかもしれませんね。」

そう私が言うと、何か重たい空気が流れた。私は思わず、二人の顔を交互に見た。

するとメルノンが私の腕を引っ張って、二人から引き離れた。

「ミウ様、その話題はちょっと…」

「え？ど、どういことですか？」

メルノンは更に声を潜め、私に言った。

「十年前ですけど、ティアナ様はシユカ様に振られているんですよ。」

「

「ええ!？」

私は驚いて大声を出してしまい、慌てて口を抑えた。

まさかティアナに、そんな過去があつたなんて…全然想像できなくて、私は気まずそうな顔をしているティアナと目を合わせた。

「ミウ様。いると思いました。」

『秘密の部屋』の、もう一つのドアが開いた。私は、今夜リュード様が来そうな予感がして、ここで待っていた。

ここに集うのは、とても久しぶりだった。この二週間、リュード様は、城の壊れた箇所と復旧と、戴冠式の準備に追われていた。私は、少ししかそのお手伝いを出来なかつたけれど。

「リュード様、あの時、何を言いかけたんですか？」

私は、ずっと気になっていた疑問を、リュード様に投げかけた。

「あの時？」

「国王の誕生会の時、お願いがあるって…」

「ああ、よく覚えていましたね。実は、そろそろ、私のことを名前

だけで呼んで頂きたいと思っただけです。」

「名前だけ…ですか？」

「そうです。」

国王となった方を、名前だけで呼んでいいものだろうか？私は返答に困った。

「あと、できれば、敬語も使わないで欲しいのですが…」

「け、敬語も？それは駄目です！リユード様は、国王となったのですから。周りの者たちに示しがつきません。」

「そうですか…では、名前だけでも。」

私は迷ったけれど、うなずいた。

「わかりました。でも一つ条件があります。」

「何ですか？」

「私のことも、名前で呼んで下さい。それから、敬語も使わないよう。」

「ええ！？そんな…」

「じゃないと、私も名前だけで呼びませんよ。」

私の言葉に、王子は笑った。

「わかりました…じゃなくて、わかった。では、そうしようか、
ウ…なんか、慣れないなあ。」

王子は、少し恥ずかしそうに頭を掻いた。

「はい、リユード。」

私も少し気恥ずかしさを覚えながら、答えた。

第十七話

眼前に広がるのは、海だけ。太陽が空の上に輝いて、その陽射しが水面に反射している。波風は少し冷たくて、けれど体いっぱい吸い込むと、清々しい。

船は風の力を借りながら、順調に進んでいる。私は甲板に立って、飽きることなく海を眺めていた。夜には、世界一の大国アレイオンに着く予定だ。

「ミウ、寒くない？」

隣にリユードが来て、私にたずねた。

「大丈夫です。厚着してきましたし。」

「そっか。でも、体が冷えない内に戻るんだよ。」

「はい。」

リユードは、また船の中へ降りていった。今、色々と仕事を立て込んでいるようだ。

今回、アレイオンへ行くのには、二つ理由があった。一つは、我が国とアレイオンで条約を結ぶ為。互いに経済発展の為に協力し合い、まずは関税の撤廃の条約を結ぶ。

もう一つの理由は、アレイオン国王と王妃の結婚式の為だ。国王は、自分の元護衛であった女性と結婚するらしい。国王が護衛と結婚するということはとても珍しく、私はどんな方なのだろうと興味を惹かれていた。

アレイオンまでは、朝に船を出して、夜到着するくらいの距離だ。私は今まで一度も行った事が無くて、今回の旅を楽しみにしていた。

アレイオンは北方の国で、今は一年で最も暖かい時期らしい。だが、リロニアの者にとっては、余分に一枚着ていないと眠れないくらい寒いみたいだ。あちらの方々は、それでも半袖一枚で過ごしているようだけど。

「ミウ様は、船酔いしなくて良かったですね。」

ティアナが、私のもとへ来て言った。彼がそう言うのは、メルノンが酷い船酔いで寝込んでいるからだ。

「ええ。やっぱりメルノンは、城に留まるよう言いつけた方が良かったでしょうか…?」

「気にしなくていいですよ。彼女が来たいって言ったんですし。アレイオンに着いておいしいものでも食べれば、ケロっと直りますよ。」

確かに、それはありそうだな、と思って私は笑った。メルノンはおいしいものに目がなく、どんなにお腹いっぱいでも食べようとする。

「ねえティアナ、王妃様って元護衛だったんですよね？どうやって国王の目に止ったんでしょうね？」

「うーん、そうですね…聞いた話だと、王妃様は元々世界各地を放浪していたそうです。で、アレイオンに行った際に、暴漢から襲われそうになった国王様を助けたということです。」

「へえ、それで…でも、どんな王妃様なんでしょうね？シユカさんみたいに強いのかなあ。」

「やめて下さい、あんな強い女がこの世に二人もいるなんて…！」

ティアナは、心底嫌そうに顔をしかめた。

「でも、暴漢から助けたっていうくらいだから、やっぱりシユカさんくらいの体格がありそうじゃないですか？背が高くて、がっしりとして、頼りがいのありそう…」

「もしそうだったら、国王様の女性を見る目を疑いますよ。」

「でも、それならティアナも…」

と私は言いかけ、はっと言葉を呑み込んだ。ティアナは窺わしい目で私を見ている。

「何ですか、私の女性を見る目も無いっていうんですか。」

「ち、違います、そうじゃなくて…」

「それを言うなら、ミウ様の男性を見る目も無いですよええ。まあ、

昔のことですけれど。」

ティアナは、にやりと笑った。

「な、何ですか、それはいつのことを言っているんですか…！」

「さあ、いつのことでしたっけねえ？」

「…！」

クククと笑いながら、ティアナは去っていった。間違いなく、シユレニアの王子のことを言っているのだろう。

けれど私はもう彼のことを忘れたし、時々、ほんの少し思い出すくらいだ。前みたいにな、切なくて眠れなくなる、なんていうことは全く無い。

彼は今、どうしているのだろう。ミアとは別れ、国へ戻ったとは聞くけれど…。きっと、どこかの国の王女と結婚して、穏やかな生活を営んでいるのかもしれない。ただ、幸せになつて欲しいと、それだけを願うばかりだ。

日が暮れかけた頃、船は港に着いた。そこから城まで馬車で移動し、私はリユードと共に、国王様へ挨拶をしに伺った。

「よく参られました、リロニア国王。長旅で疲れたでしょう。今日はゆっくりと休んで下さい。それから、こっちが私の妻のラティです。」

国王様は、世界一の大国の王に相応しい威厳を放っていた。私はその雰囲気気圧されて、少々怖気づいてしまった。

しかし、国王様の隣にいる女性は、反対に柔らかい雰囲気を持っていた。シユカさんみたいな女性を想像していたけれど、全く違つて背が低く、どちらかというと華奢な感じだ。

「ラティと申します。よろしくお願いします。」

その女性は、頭を下げて言った。

「この度は、ご結婚おめでとございます。後ほど、祝いの品をこちらから贈らせて頂きます。それと、こちらは私の婚約者です。」

私は紹介されて、頭を下げた。

「ミウ・シグナです。よろしくお願いします。」

「リロニア国王から話は聞いている。こちらへ来るのは初めてだそうだな。ラティ、城の中を案内してあげなさい。」

「はい。ミウ様、行きましょう。」

私は、ラティ様のことについて歩き出した。

「ミウ様は、ユーレニアのご出身なんだそうですね。以前、一度だけ行ったことがあります。とても良い国でした。あ、もちろんリロニアもですけどね。」

ラティ様は、可憐な花のような笑顔で言った。

「ユーレニアに、いらっしやったことがあるんですか？」

私は驚いて、たずね返してしまった。ユーレニアは工業国であるので、観光を訪れる人は少ない。

「ええ。世界を旅していたものですから。」

「一人で、ですか？」

「いえ、犬のロンダと一緒に。」

「は、はあ……」

犬がいるにしても、心細くないのだろうか。私にはきっと、一人旅なんて無理だ。

「何歳から旅をしていたんですか？」

「十二歳から十五歳までです。」

十二って、そんな小さい頃から……何だかものすごく、尊敬してしまっ

「今は、おいくつですか？」

「十六です。ミウ様は？」

「私は十七で、来月十八になります。」

私たちは中庭に出て、そこにある木の長椅子に腰掛けた。空には半月が輝いている。少し離れたところでは、数人の男女が私たちと同じように座って話し込んでいる。

「あの…ミウ様は、生まれた時から王族なんですよね？」

「え、ええ、一応…」

「もし、失礼なことを言ってしまったらすみません。私、今まで多くの王族の方と会ってきたけれど、ミウ様みたいに話しやすい人、初めてです。」

「そ、そうですか？」

私は、自分でもどちらかというところ『話しかけやすい人』だと思っ
ていたけれど、面と向かって言われたのは初めてだ。

「結婚式で、王族の方が続々といらっしやっていますけれど…
良くないことばかり言ってくる人が多くて…」

世界一の大国の妻になるということは、それだけ嫉妬や反感を
買いやすくなるということだ。もしある国の王女が王と結婚をすれば、
大きな後ろ盾を得られるだけで無く、自国の発展にも繋がる。

「一体どんな弱みを握ったんだ、とか、王に何か薬を飲ませたんじ
ゃないか、とか…それが、王族の人だけじゃなく女官の人たちにも
…」

ラティ様の顔は、今にも泣き出しそうだった。私はそれを止めた
くて、慌てて言った。

「だ、大丈夫ですよ！周りの人たちが色々と言うかもしれませんが、あなたには…王が、あなたを選んだんです。それだけの価値が、あなたにはあるっていうことですよ。」

するとラティ様は、驚いたような顔で私を見上げた。

「…ありがとうございます。ミウ様は、お優しいんですね。」

「や、優しくなんて…当然のことを言っただけです。」

表情が戻ったラティ様の顔を見て、私はほっとした。

「ミウ様、あの…私、王族の方に知り合いもいなくて…是非、その…仲良くして頂きたいんです。」

「ええ、もちろんです。私で良ければ…」

「本当ですか！？ありがとうございます。」

ラティ様の顔が綻んだ。その笑顔は、人を幸せにするような笑顔だった。私は何故国王が彼女を選んだのか、わかった気がした。

「明日の夜のお披露目は、ミウ様ご出席しますか？」

お披露目は、結婚式の前日の夜に行われるもので、各国の王族が集まって盛大なパーティーをする。

「ええ、出席します。」

「そうですね。もし明日、それまでの時間が空いているようでしたら、城のまわりを散策してみませんか？今は丁度フィーアの花が咲いているんです。」

私は、うなずいた。

「いいですね。一緒にさせていただきます。」

「そうだ、ミウ様。まだお湯は浴びていないですよね？このお城の浴場から見る眺めは、とても良いんです。一緒に入りませんか？」

「あ、そうですね。では一緒に入りましょう。部屋まで着替えを取りに行ってきます。」

私は、滞在している間泊まる部屋へ行くと、リユードが、二つあるベッドの内の一つに寝ていた。私は驚いて、廊下にいるティアナに呼びかけた。

「ティアナ、部屋、ここで…」

「はい、そうでございますよ。たくさんの方々がいらっしゃってて部屋数が足りないから、二人で使って下さいとのことですよ。」

私はティアナに疑いの目を向けながらも、ドアを閉めた。

リユードは寝息を立てて、ぐっすりと眠り込んでいる。最近ずっと、忙しそうだったからなあ。でも条約の調印が終われば一段落するって言うってたから、国へ戻ってからはゆっくりと話すことが出来

るだろう。

私は自分の着替えを持って、また部屋から出た。

浴場の前にある着替え場には、女官の方が二人待機していた。

「着替えを手伝いましょうか？」

「いえ、大丈夫です。」

私は断って、自分で服を脱ぎ始めた。

「ミウ様って、お一人で脱ぎ着が出来るんですね。王族の方って、皆自分で着替えが出来ないものかと思っていました。」

ラティ様はそう言いながら、自分の服を脱いだ。

「ええ、私は自分で出来ることは自分でするように……って、ラティ様、その傷は？」

ラティ様の背中には、右肩から腰にかけて湾曲した傷跡があった。するとラティ様は笑って、

「ああ。国王様が襲われかけた時に庇ったんです。」

と何でもないように言った。その傷の痕は痛々しく、私は何とも言えない気持ちになった。

ラティ様は浴室のドアを開け、中へ入っていった。私もつづいて

中へ入り、浴室のドアを閉めた。私とラティ様は体を軽く流してから、湯の中へ浸かった。

浴場には大きな窓があり、そこから街の明かりが灯っている様子が見えた。それは夜空に浮かぶ宝石のようだった。

「本当に、綺麗な景色ですね。」

「でしょう。初めて見た時、私感動して、肌がふやけるくらいずっとここにいたんです。」

熱めのお湯と、少し開いた窓から流れてくる風が、心地よかった。船旅の疲れが、一気に吹き飛ばようだった。

「どうしてラティ様は、旅に出たんですか？」

私は湯の中でラティ様と向かい合いながら、たずねた。

「私、元々孤児で、修道院で育ったんです。そこには、時々旅人さんが来て、泊まっていたりもしました。私はその旅人さんたちの話を聞いて、旅に出たいって思ったんです。」

「一人で行くのは、怖くなかったんですか？」

「やっぱり怖い気持ちはありました。でもそれ以上に、ドキドキ感がありましたね。」

「すごい勇気だと思います。私なら国の外に出ることすら怖いと思ってしまう。本当に、うらやましいです。」

「そんなことありませんよ！この前リユード様がいらつしやった時に、お話を聞いたんですけれど…ミウ様、国を取り戻す為に、向かってくる兵士たちへ頭を下げたとか…それは、普通の人じゃ出来ないことです。大変ご立派なことだと思えます。」

「そ、そうでしょうか…」

私は褒められたことに恥ずかしくなって、遠くの街の明かりに目をやった。

「だから、ずっと気になっていました。どんな方なのかなあっても今日会ってみて、本当に良い方だなと思いました。」

「そ、そんなことないです！ラティ様の方が、私なんかより、余程ご立派です。」

私たちは互いに褒め合って、恥ずかしさで笑い合った。

第十八話

城を囲む庭園では、私たち以外の王族も散策していた。

私は城の庭園を、ラティ様と共に歩いて回った。庭園では、白くて大きな花を咲かせるフィーアの花が満開で、芳しい香りを放っている。この花は、この国の国花であるらしい。

「ミウ様、部屋へ飾るのに幾つか摘んでいきますか？」

「ええ、そうですね。頂いていきます。」

女官の方から、手袋と鋏を渡された。私は手袋をはめて、鋏の刃を茎に当てた。

「切る位置は、この辺で……」

と言いながらラティ様の方を見た時、ラティ様は険しい顔をして遠くの方を睨んでいた。メルノンも、ラティ様と同じ方向を見ている。

「ラティ様……？」

と私が声をかけると、ラティ様はいつもと同じ穏やかな表情に変わった。

「あ、何でもありません。切る位置は、その辺で大丈夫ですよ。」

私は、何があったのか気になりつつも、その茎を切った。

「本当に綺麗な花ですね。私の国にも持って帰りたくらいです。」

「それは、是非株を持って行って下さい。リロニアは温暖な国だそうですが、この花は暑さにも強く、病害虫にもやられにくいですから。」

「いいんですか？」

「ええ。あとで、ミウ様たちの船に運ばせておきましょう。」

そう言って、ラティ様は、にっこりと笑った。さっきの不安な表情を押し隠すかのように。

「ラティ様、そろそろお仕度の時間です。」

一人の女官が、ラティ様を呼びに来た。

「わかりました。では、ミウ様、また後ほどお会いしましょう。」

「ええ。では、また。」

私もそろそろ着替えの時間の筈だ。私は、メルノンと共に、自分の部屋へ向かった。

「ねえメルノン、さっき、何かあったんですか？」

「いえ、実はさっき、変な人影が見えたものですから……でもそれは、女官の方でしたので。」

「なるほど、そうだったんですか。」

私は、ほっと安心して、自分の部屋へ入った。

夜のお披露目式が始まり、私とリユードは手を繋いで、大広間へ入った。会場には多くの王族が集まり、賑やかな声が響いていた。楽団の音楽も、人々の談笑で消えかかっている。

「さすが、すごい人だな。ミウ、何か飲む？」

「ええ。アルコールの入っていないものがあれば……」

すると、料理類の運び役の男性がやって来て、私たちに飲み物の入ったグラスを渡した。

「この国で採れた果実を混ぜて絞ったものです。どうぞ。」

「アルコールは？」

「入っていません。」

それを聞いて、私はそれを飲んだ。少し酸っぱかったが、甘くておいしい。仕度で長い時間水分をとっていなかったなので、体に染み渡るようだった。私は全て飲み干した。

「おいしかったです、ありがとうございます。」

私は、グラスを男性に返した。リユードもそれを飲み干し、グラ

スを返した。

「リロニア国王、お久しぶりですな。」

後ろから声をかけられ、振り向くと、オルニアの王がいた。私は以前、どこかの国の王の誕生日会で一度だけ挨拶をしたことがある。年齢六十を過ぎているが、未だに現役で政務についている。

「オルニア国王、お久しぶりです。」

「即位おめでとございます。そちらの方は？」

「私の婚約者です。」

私は、オルニアの王に頭を下げた。

「ミウ・シグナです。よろしく申し上げます。」

「ああ、ユーレニアの妹姫か。こちらこそよろしく。ところでリロニア国王、仕事の話しても良いか？そちらの国の小麦を、こちらで輸入したいのだが…」

「ああ、なるほど…」

リユードは、ちらっと私の方を見た。私は、立ち聞くのも忍びなかったので、その場を離れることにした。

「ちょっとお手洗いに行つてきます。」

こういった王族が集まる機会というのは、単なる交流の場でなく、

仕事の話をする場でもある。そんな時、連れ添いの女性はさつとその場を離れるのが良い立ち振舞いとされていた。

私は大広間を出て、一人手洗い場へ向かった。大広間のあるこの階は立ち入りが制限されていて、護衛の者すら入ることが出来ない。私は女官の方に聞きながら、手洗い場へ着いた。

そして用を済ませ、そこから出て歩き始めた時、私は思いがけない人に会った。

かつての想い人だった、シュレニアの第二王子。

王子は、昔と全く変わらない柔らかな微笑みを私に見せた。

「お久しぶりです、ミウ様。」

「あ…お久しぶりです。」

私は何と言ったら良いかわからなくて、必死に言葉を探した。しかしその前に、王子が口を開いた。

「ミアの件で、ご迷惑をおかけして申し訳ありません。彼女を止められなかったのは、私のせいです。」

「そんな、違います！あれは、ミア自身がやったことです。あなたのせいではありません。」

私は、はっきりと言い切った。

「…安心しました。」

「え?」

「ミウ様が、以前と全く変わっていなくて…」

「そう…ですか。私も、安心しました。あなたが以前とお変わりなく。く。」

私は言って、笑顔をつくった。こうやって笑えるのも、時間とりロニアの人々がその傷を忘れさせてくれたおかげだ。

「いえ、お恥ずかしいです。私は出戻って、兄のもとに居座っていますから…あなたのように国を出て、自分の務めを果たすことも出来なかった。」

「自国で、お兄様の政務の手伝いをなさっているんですか?」

「ええ。微力ながらも。」

私は、ふと王子の左手に目をやった。そこには指輪が無かった。王子は、まだ結婚をしていないのだろうか。

「ミウ様はまだ、リロニアの王子と結婚の契約を結んでいないんですよね?」

「え?ええ。でも、私もそろそろ…」

「私の国へ来ませんか、ミウ様。」

私は、王子が何を言っているのかわからなくて、呆けたまま王子を見つめた。

「おかしなことを言っているのは、自分でもわかっています。あの時、私はあなたの気持ちを受け止められなかったけれど…今ならそうすることもできます。」

「あの…」

「国の為を思えば、私はミアと婚約するしかありませんでした。けれどそれは、もう終わったのです。今なら、私はあなたと一緒に…」

「ミウ！」

リユードの声が、廊下に響いた。怒りを含んだような威圧感のある声。こんな声を向けられたのは、初めてだった。

リユードは私の手を取ると、強く引っ張った。私はそれに引かれながら、彼のあとを追って歩いた。

「まだ、あの王子に気があるのか。」

急に立ち止まり、リユードは私の手を離した。さっきと変わらぬい、熱いけれどとても冷えた声だった。

「違います…！ただ、偶然会って、それで…」

「じゃあどうして、はっきりと断らないんだ！」

その声に、私の肩が震えた。

「あの王子は、政治的に利用しようとしているのかもしれないんだぞ。それなのに…」

「そんな、あの王子はそんなこと…」

「あなたは、少し自分の立場を理解した方がいい。それとも、あの王子のもとへ行くつもりなのか？」

蔑んだような彼の眼差し。私は、悲しくなって、涙が溢れ出てきた。三年も一緒にいたのに、結びつきは、この程度だったのか。

「リユードは…私のことを、信じてくれないんですね…」

私はとにかく一人になりたくて、彼から離れて走った。彼は、追っつてこなかった。

中庭へ出て、昨晚座った長椅子に腰掛ける。あたりには人の姿が無く、私は我慢していた嗚咽を漏らした。

あの王子のもとへ行くつもりなんて、全く無い。けれどリユードは、私を疑っていた。中々返事を出さなかった私のせいもあるだろう。

だが、リユードは勘繰り過ぎなのだ。それで疑心暗鬼になってしまっている。何も、不安に思うことなど無いのに、それに囚われている。

疑われていることが、悲しかった。私は彼にとって、それほど深く心を通わせた相手では無かったのだ。

ひとしきり泣くことに集中すると、私は少しすっきりした。夜空の月が、眩しく見えた。

しかしその時、突然、猛烈な睡魔が襲ってきた。頭の奥が強く痺れるような感じがして、私は一気に意識を閉じた。

第十九話

太陽の光が、直に当たっている。私はその熱さと眩しさで、目を覚ました。

「ミウ様、気付かれたのですね。」

目の前には、ラテイ様がいた。ラテイ様は後ろ手で縛られ、体を柱にくくりつけられている。私は状況が飲み込めず、言葉を発せられなかった。

「ミウ様。お怪我はありませんか。」

「は、はい……」

体に痛みは無い……と思ったが、手首が少し痛んだ。私も縛られているらしく、縄が手首に擦れているような感じがした。

「ここは、どこですか……?」

室内には、何もない。古びた木の床と、木の壁、柱があるだけだ。すると、ラテイ様は声を潜めた。

「わかりません。けれど、外には見張りのいる気配がします。」

「見張り……?」

私も声を潜めて、言った。

「ミウ様は、何故自分がここにいるのか、心当たりはありますか。」

私は、首を横に振った。

「ラティ様は、お心当たりが？」

「ええ、たくさん。」

ラティ様は、苦笑いをした。

「しかし、私とあなたは、大国と呼ばれる国の王妃と婚約者です。

私たちを殺したり、危害を加えたりしたらどうなるか、犯人も分かっているはず。恐らく私たちは、人質なのでしょう。」

「人質…？」

「ええ。例えば、王を脅迫して、犯人にとって有利な契約を結ばせるとか…」

私は、昨晚のリユードの言葉を思い浮かべた。

『あの王子は、あなたを利用しようとしているのかもしれないのだぞ。』

けれどまさか、あの王子がそんなことをするとは思えない。きっと、違う。そう思ったかった。

「何とかここから逃げられないでしょうか？」

私は、たずねた。リユードには迷惑をかけたくない。私のせいで国に何か不利なことが起こるかもしれないと考えると、私は居た堪れない気持ちになった。

しかし、ラティ様の顔は沈んでいた。

「ラティ様…？」

「ミウ様、私は不安なんです。このまま王のもとへ戻っていいのか。私は王に相応しくないんじゃないかって、何度も考えてしまってます。」

「そんなこと、ありません！」

私は否定をしたけれど、ラティ様の表情は変わらなかった。

「いつそいなくなった方が、国にとって良いのかもしれない。国民だって、もつと高貴で生まれの良い人を望んで…」

「では、王の気持ちはどうなるんですか！王はあなたの帰りを待っています！待ってくれている人が一人でもいるなら…あなたはそこへ、帰るべきなんです！」

私は、リユードのことを思い出した。あんな別れ方をしてしまったけれど、彼もきつと、私のことを待ってくれていると思う。だから私は、帰らなければいけない。

「ミウ様…」

「一緒に帰りましょう、ラテイ様。」

すると、ラテイ様はうなずいた。

「私は一度覚悟を決めたのに…また逃げ出そうとしていました。私は、王のもとへ帰りたい。」

その瞳には、強い光が宿っていた。

「けれどそうするには、まずこの縄をほどかなくてはいけないですね。」

ラテイ様は、手を縛られている上に、体まで柱に括り付けられている。私の方が、ラテイ様よりも自由がきく。

私は何か縄を解けそうなものを探したが、部屋の中には物自体が無い。身に付けていたアクセサリ類も全て外されていて無い。

「ミウ様、私の髪の中に小さい髪留めが残っているかもしれません。」

ラテイ様が言い、私は立ち上がって、ラテイ様の髪の中を探させてもらった。すると、数本の細い髪留めがあり、私はそれを取った。

「ミウ様、貸して下さい。先にあなたの縄をときます。」

ラテイ様は縛られた状態であるにも関わらず、その細い髪留めを私の縄の結び目に入れて動かした。

「これでも一応護衛役でしたからね。こういうのは心得ています。」

時間はかかったが、縄が緩み、私はそれを自分で解いた。そしてラティ様に指示された通りに髪留めを使って、同じようにラティ様の縄を解いた。

「問題は、ここからですね。ミウ様、少々危険が伴いますが、大丈夫ですか？」

私は、うなずいた。

「大丈夫です。」

ラティ様はほどかれた縄を持って、小さな窓から外の様子を伺った。私はその後ろから様子を見守った。見張りの人の頭らしきものが、窓の下でかすかに見える。窓は開きそうだが、とても小さすぎてここから出ることは出来ない。

その時、ラティ様はその窓を開けたのと同時に、見張りの人の首に縄をかけた。

縄を窓の縁にかけてこちら側に引っ張ると、見張りの人の体が浮いた。やがてその人の腕が力なく垂れると、ラティ様は素早く縄をとって、窓を閉めた。

「おい、今の音は何だ？」

外から男の声と、走る音が聞こえた。

「倒れている奴がいるぞ！どこかから襲撃があったのかもしれない、探しに行け！」

再び、走る音。それが遠のいていくと、ラティ様はドアの横へ行って私に手招きをした。私はラティ様の隣へ行くと、ラティ様は外へ向かって声をかけた。

「どなたか、いらつしやるんでしょう。今何かあったんですか？」
すると少し間をおいて、返答があった。

「何でもありませんよ、王妃様方。助けに来ることなんてありませんから、静かに待っていて下さい。」

「そうですか…ではお願いがあるのですが…寒くていてもたってもいられません。何か布のようなものを頂けませんか？」

「…仕方ないな。」

ドアが、ぎいっと音を立てて開いた。ラティ様は男の懷に飛び込んだ。何が起こったのかわからなかったが、男は後ろ向きに倒れていった。ラティ様が拳を押さえているのを見ると、男の腹を打ったのだらう。

「ミウ様、行きましょう。」

「は、はい…」

私とラティ様は、小屋から抜け出して、裸足で森の中を走った。

「恐らくここは、アレイオンと隣国の国境付近でしょう。知っている場所でした。」

ドレスの裾をたくし上げて走っていたが、とても走りづらくて腕も脚も疲れる。その時、ラティ様も同じことを思ったのか、止ってドレスの裾を裂いた。

私も同じように裂こうと思ったが、力が足りなくて裂けない。するとラティ様が、裾を裂いてくれた。

「さあ、参りましょう。」

私たちは再び走り始めた。

「条約を破棄しろ、と？」

私は目の前にいる男、世界でアレイオンに次ぐ大国、オルゼロの王の言葉を繰り返した。

「そつだ。大事な婚約者に万が一のことがあって良いのか？」

私はずっと、昨日のことを悔やんでいた。あの時ミウを追っていたら、こんな事態は起きなかった。彼女を信じられなかった、私の責任だ。

「アレイオンと条約を破棄した後は、我が国と条約を結んでもらう。」

オルゼロの王は、書類をテーブルに置いた。私はそれを取り、読んだ。

「関税率は、我が国がそちらの三倍？こんな条件を……」

飲めば、国の経済に影響が出る。最近ようやく、軌道に乗り始めたというのに。

「嫌ならそれで良い。但し、あの美しい姫がどんな姿で戻るかは保障できぬが。」

私は、今すぐにでも目の前にいる男を切り捨てたいところだった。この王は、我が国とアレイオンが手を結ぶことを良く思わず、このような手段に出た。

「国を取るか、大切な女を取るか。あなたの好きにして良いと言っているのだぞ？」

オルゼロの王は、口の端を歪ませている。

「昨晚、飲み物に薬を入れたのも、そちらの仕業か。」

「何のことだ。知らぬな。」

昨晚、ミウと別れてすぐに強烈な眠気が襲ってきた。きっとあれも、この王たちの仕業だろう。だが、この者たちだけで行動を起こしたとは考えづらい。恐らく、アレイオンにもオルゼロと手を結んだ者がいるだろう。

「さて、そろそろ決めてもらおう。リロニアの若き王よ。」

「…わかった。」

私は、立ち上がった。ミウを失うことなど、私には考えられない。

しかしその時、誰も入るなど言っていたのに、部屋へティアナが入ってきた。

「王よ、ご報告致します！ミウ様とラティ様が国境警備兵に発見されたということです！」

「…わかった。すぐ迎えに行くと言っておいてくれ。」

私は書類を破り捨て、呆けている王を一瞥すると、部屋から出た。

第二十話

私とラティ様は警備兵の住む小屋で待っていると言われ、奥の部屋で体を布にくるんで兵士たちのベッドに体を休ませていた。

ここに辿り着いた時、兵士たちは、私たちをどう扱っていていいかわかり戸惑っていた様子だった。私とラティ様は汲んできてもらった水で足の汚れを落とし、細かい傷の手当も自分でした。破れたドレスはそのまま着て、布だけ貸してもらったことになった。

「私たちを城まで運ぶ馬車が到着するまで、私たちは待つことになった。」

「ミウ様、足の傷は大丈夫ですか？」

ラティ様が、薬などの入った箱を片付けながら言った。

「ええ、歩くと少し痛いですが、大丈夫です。でも城へ帰ったら、一度診てもらった方がいいですね。」

「そうですね。私も結構切ってしまったので……」

ラティ様は言い、足の包帯を手でなぞった。

「でも、私たちを攫ったのは誰なんでしょうね？ラティ様は、心当たりがあると言いましたが……」

「ええ。多すぎてわからないくらいです。」

ラティ様は苦笑し、足をベッドに投げ出した。

「けれど一つわかるのは、今回のことに我が国の者も絡んでいるということですよ。きつと捜査が行われて、炙り出されるでしょうね。王はそういうことを決して許さず、全て断ち切るようなお方ですから…」

「例えば、どういう方に心当たりがあるのですか？」

「そうですね…王のことが好きだった女官や、自分の娘を王の妻にし損ねた大臣や官僚、それから他国の姫など…ミウ様は、リロニア国王と婚約することで、誰かに恨みを買いませんでしたか？」

「え？」

「そういえば、恨みという恨みを買ったのは、ミアだけだ。女官の人たちも、大臣たちも、とても良い人ばかりだった。」

「いえ、私は特に…きつと、取るに足りない女だと思われているのでしょうか。」

「そんなことはありません。ミウ様は立派すぎるから、恨みを起こす気にもならないんですよ。」

そう言ってラティ様が微笑んだ時、突然ドアが開いた。

「リロ…」

名前を言い終わらない内に、リユードが私のもとへ来て、強い力で私を抱きしめた。

「ごめん、ミウ…本当にごめん…」

彼の腕の中は泣きたくなる位心地良くて、私はリユードの背中に腕をまわした。伝わる温もりが懐かしくて、私はまたここへ戻ってくる事が出来て、本当に良かったと思った。

「私の方こそ、ごめんなさい…」

「違う、ミウは悪くない。私が勝手に怒って、拗ねていただけだ。」

拗ねていた、という言葉に私は思わず笑ってしまった。

「とりあえず、城へ戻って少し休もう。」

そうリユードは言う、私の体を抱きかかえた。そんなことをされるのは初めてで、驚いたけれど、大人しく従うことにした。

見ると、アレイオンの王も来ていて、ラテイ様と抱き合っていた。ラテイ様は、泣いていた。

あんなに強いラテイ様だけれど、きつと不安で仕方なかったのだろう。その涙を見たせいか、私はその時初めて、ラテイ様を自分に近いものとして感じられた。

私とリユードは静かに部屋を出て、一足先に城へ戻った。私は足の怪我を診てもらうと、リユードと共に部屋へ戻った。

この間、ずっとリユードが私の体を抱きかかえて移動していた。

恥ずかしいし、歩けると言っただけで、聞き入れて貰えなかった。

私はベッドに下ろされて、シーツを肩までかけられた。まるで病人か、子供だ。

「少し眠った方がいい。疲れた顔をしている。」

「リユードも、疲れた顔を…」

「私は大丈夫だ。少し仕事が残っているし…終わったら、起こしに来るから。一緒に夕食をとろう。」

私は、うなずいた。私の髪を撫でる彼の手が名残惜しかったけれど、私は引き止めなかった。

彼の言う仕事とは、今回の事件を起こした者の始末と処遇。

「では、行ってくる。」

私は、今回どのような者が私たちを攫ったのか気にかかっていた。起きたら、リユードに事の顛末を聞こう。そう思いながら私は瞼を閉じた。

今回の事件に関わったのは、オルゼロの者とアレイオンの女官数名。オルゼロの思惑は、我が国とアレイオンの友好関係を壊す為、そしてオルゼロにとって有利な条約を結ばせる為であった。女官たちが協力したのは、ラティ様に嫉妬心を抱いていたからだだった。

我が国もアレイオンも、オルゼロとの国交を断絶することに決めた。そして制裁はそれだけでなく、アレイオンと我が国に關係の深い国にも、オルゼロとの国交を断絶させることになった。

「アレイオンは世界一の大国で、我が国は世界で三番目の国と言われている。その二国が手を結ぶとなれば、オルゼロにとっては脅威だったんだろう。だがまさか、こんな強硬手段に出るとは、思ってもみなかった。」

リユードは言い、水を飲んだ。オルゼロは共産主義の国で、石炭などの鉱物によって栄えてきたが、最近はその採れなくなったと聞く。私は行ったことが無いが、以前聞いたミアの話だと、『寒くて何も無いところ』だという。

「明日は、昨日行っただった、王と王妃の結婚式が行われる。私たちはそれが終わったら、国へ戻ろう。少し慌ただしいけれど。」

「はい。明日は何時から式が始まるんですか？」

「午前十時頃だ。一時間程で終わるということだから、明日中にはリロニアへ帰れるだろう。」

ラテイ様と別れるのは少し淋しいけれど、私は、明日帰れるということに安心していた。リロニアは、すっかり私の故郷になったんだな、と私は思った。

「ミウ、湯浴みは今日する？もしするなら、メルノンが手伝うと言っていたけれど……」

「そうですね。今日入ります。」

「じゃあ浴場まで運ぶよ。」

とリユードが言ったので、私は慌てて言った。

「大丈夫です！そんなに痛くないし、一人で歩けますから！」

「駄目だよ、傷口が開いたらどうするんだ？」

「開くっていう程大きな傷じゃないです。」

「…じゃあ、途中までついていく。」

私はリユードの腕につかまって、部屋を出た。見上げると、リユードは少し拗ねたような表情をしていて、私は笑い出しそうになってしまった。

純白の衣装を身にまとったラティ様は、天からの使いのように綺麗だった。私はずっと、その姿に見とれていた。

ラティ様は、王と口付けを交わした。すると周りから歓声が起こり、二人は微笑んだ顔を見せた。私は拍手をしながら、ラティ様が

未永く王と幸せに暮らせるよう祈った。

ラティ様は、私に気が付くと、王へ声をかけてから私のもとへ来た。

「ミウ様、今日お発ちになってしまっんですね。寂しいです。」

「私も、寂しいです。でもまた必ず、来ますから。ラティ様も是非我が国へいらして下さいね。」

そういえば、ラティ様は私にとって初めて友人と呼べる人だったのだと、今更気がついた。そう思うと、急に別れが辛くなってしまった。

「ええ、必ず行きます。手紙も書きますね。」

「私も、書きます。」

私は笑顔をつくって、ラティ様と握手を交わした。

ラティ様が王に呼ばれて、その後姿を見送ると、私はリユードとともにその場から離れた。

「二人とも、幸せそうな顔をしていましたね。」

「ああ。あんな王の顔を見たのは初めてだ。」

確かに、以前会った時には萎縮するような威圧感を放っていた王だったけれど、今日はそんな雰囲気を感じられなかった。

「ミウ、国へ戻ったら何をしたい？」

「戻ったら…ですか？うーん…作りかけの裁縫を終わらせるのと、ラティ様からもらった鉢を植えるのと、それから…リユードと、散歩をしたり、したいです。」

「そうか。では、早く仕事を終わらせなければ。」

リユードは、微笑んで言った。

「ミウ様！」

後ろから声がかかり、私とリユードは立ち止まって振り向いた。そこには、シュレニアの王子がいた。

「ミウ様…あなたのお気持ちを、聞かせてもらえませんか？あなたがまだ私のことを好きでいてくれたのなら、私は…」

リユードの腕を、ぎゅっと握り締める。するとリユードが、私に言った。

「ミウ、選んでいいよ。」

「…え？」

「ミウの望む方を、選んだらいい。私はミウのことがとても好きだけど…その心まで縛ろうとは思わない。ミウが幸せになれるなら、私から離れるのも仕方ないと思っている。」

私がリユードの顔を見上げると、リユードは真っ直ぐに私を見つ

めた。

「だから、選んでくれ。私か、あの王子か。」

私は、リュードの腕を離さずに言った。

「私は、あなたの側にいたいです。どうか…お願いです。ずっと一緒に、いさせて下さい。」

するとリュードは、私を強く抱きしめた。

「お願いなんかしなくても、離したりしないよ。」

やっぱりリュードの腕の中は、春の木漏れ日のように暖かい。ここが私にとって、一番居心地のいい場所だ。

「そういうことです、シユレニアの王子よ。それでもミウが欲しければ、国を賭けて来られるが良い。」

私はリュードとともに、その場から立ち去った。シユレニアの王子は、それ以上追ってこなかった。

「ねえ、リュード。」

「ん？」

私は、船室の窓から外を眺めているリユードにたずねた。

「どうしてさっき、シユレニアの王子と、リユードを選ばせるようなことをしたんですか？」

「そりゃ、自信があったからだよ。」

リユードは笑って言い、私の隣に座った。

「絶対に行かないと思った？」

「思ったよ。でも、言葉が欲しかった。」

リユードは、私を抱きしめた。

「ミウ、私を選んでくれたっていうことは、私と一緒にしてくれるんだな？」

「はい。」

私は、はつきりと答えた。リユードは、私を離して、私の目を見つめた。

「これから、辛いことがあるかもしれない。大変なことも、悲しいことも…それでも私と、一緒にいてくれるか？」

「はい。ずっと一緒にいて、リユードを支えます。生きている限り、あなたの側にいます。」

「では、改めて…私と結婚してくれるか、ミウ。」

「はい。」

私の頬に、リユードの手が触れた。そして、初めての口付け。それは長くて、甘かった。

唇が離れると、リユードは笑って、また私の唇を塞いだ。何度も、それは繰り返した。

第二十一話

リユードとの挙式は、一カ月後の私の誕生日になった。急に決まったので、周りの者たちが対応に追われることとなる。私はそれを申し訳なく思っていたが、皆口を揃えて言うのは、『ようやく結婚してくれて嬉しい』ということだった。

私とリユードは、私の両親へ挨拶をしにユーレニアへ向かった。お父様もお母様も、以前より顔色が良く、頬も艶やかだった。

「この度は、突然式を挙げることになってしまっって申し訳ありません。」

リユードは、頭を下げて言った。

「いや、私たちはずっと待ち望んでいたからな。実は、ミウとの婚約が決まった時既に、指輪を作らせていたのだ。しかし、王の手には小さいだろうと思っつてな。今また作らせたいのだが、あとでサイズを測らせてもらえるか、王よ。」

「ええ、勿論です。ありがとうございます。」

「二人とも、今日は泊まっつていっつてくれるのだろう？」

「ええ、お世話になります。」

「ゆっくりしていっつて下さいね。ミウ、あなたに渡すものがあります。こちらへ来なさい。」

私はお母様のあとについて行った。幼い頃よく過ごしたお母様の部屋へ立ち入る。

「この首飾りを、持っていてきなさい。これは私の祖国で古くから伝わるものです。この石が、邪気を払ってくれるとか…」

真つ白でピカピカに磨かれた丸い石のついた首飾りを、私はお母様から頂いた。幼い頃に見て、口には出さなかったけれど、とても欲しかったものだ。

「ありがとう、お母様。」

「…これからは、なかなかこちらへ来ることが出来ないでしょう。あなたのことだから心配はいらないけれど…立派に務めを果たしてね。」

「はい。…ねえ、お母様、一つ聞いてもいい？」

「なあに？」

「ミアは、あれからどうしてる？」

お母様の顔が引きつった。私は聞いてはいけないことだと思ったけれど、どうしても知りたかった。

「…ミアは、東の岬の孤児院にいるわ。」

「孤児院？」

「そこで働いて、少し自分を見つめなおすように、って国王が…私

は反対したんだけれど。だってあの子、子供が嫌いだったし…」

「行ってから、どれくらい経つのか？」

「二週間よ。今のところ、特に問題無く過ごしているようだけど…」

お母様は、心配そうな顔を崩さなかった。

「そっか、孤児院にいるんだ…」

「ええ。でも大丈夫よ、あなたのところへ行ったりすることなんてもう無いから。」

「それは心配していないよ。ただ、お父様も思い切ったことをしたんだなあ、って思ってる…」

ミアはどんな風に、子供と接しているのだろう。仲良く遊んだりしているミアの姿が想像できなくて、私は心配になった。

「リロニア国王よ、一つ聞きたいのだが…」

「何ですか？」

ユーレニア国王は、言いにくそうに顎鬚を撫でながら、言った。

「ミウ以外に、その…妻をもらう予定はあるのか？」

「いいえ、そのつもりはありません。」

するとユーレニア国王は安堵したような表情を見せて、微笑んだ。

「成程、わかった。」

「気がかりでしたか？」

「いや、その、な…ミウは今までまともに恋愛をしたことが無かっただろうから、もし国王が他に好きな者をつくったらとても落ち込むだろうと思って…だが、もらわないのなら、それで良い。」

父親としては、可愛い娘が嫁ぐというのは複雑な心境なのだろう。もしミウを悲しませるようなことをしてしまったら…そんなことをするつもりは全くないけれど、もしそうしてしまったら、冗談でなくユーレニアの軍勢が押しかけてくるかもしれない。

私は少し、背中が寒くなるのを感じた。

その後、私はミウが書庫にいると聞いて、そこへ向かった。

ミウは、ソファに座って本を読んでいた。他に人は無く、私はその隣に腰掛けた。

「少し、本を持っていこうと思って…」

「これ、小さい頃、ミウが私に読んでくれた本だな。」

確か五歳くらいだったと思う。満足に字が読めなかった私は、ミウにその本を読んでもらった。ミウを独り占めできるのが嬉しくて、他に何冊も読んでもらったなあ。

「よく、覚えていますね。」

「これを持っていくのか？」

「ええ、とても良い話で、大好きなんです。」

「そうだな。子供が出来たら、読んであげられるだろうし…気が早いかな？」

私が言うと、ミウは笑った。

「いえ、いいと思います。」

「本当？ミウは時々、適当に返事をするからな…」

「そんなことないですよ、本当です。」

私は、ミウの肩を抱いた。

「子供は、沢山欲しいな。」

「何人くらい？」

「そうだなあ…五人くらい。」

「五人!？」

ミウは驚いた顔を見せた。王族は大抵、王位争いが起こるのを懸念して、一人か、多くて二人しか子供をつくらない。

「ミウに良く似た女の子がいいな。」

「私に似た女の子?でも私は、リユードみたいな男の子が欲しいです。」

男が生まれることは、強く望まれるだろう。リロニアは代々、男のみが王位継承権を持つ国だ。男が生まれなければ、他に妻を迎え入れてでも作らなければいけない。

しかし私は、その気が無い。例え他の妻との間に愛が無くても、ミウを悲しませるようなことはしたくない。

「私に似た男の子...なあ。あまり想像できないが。」

「そうですね?私は想像できます。ちょっと大人びて、熱い男の子。」

「そんなに熱くないよ、私は。」

熱そうに見えるだけで、内面は自分でも驚く程冷えていることがある。ただミウに関しては、別なだけで。

「ティアナには見破られていて、王は本当に冷めていますね、って言われるよ。」

「え？本当ですか？」

「本当だよ。今だってほら、手も冷たい。」

ミウは、私の手を握った。

「…うそ、あつたかいですよ？」

私は笑って、ミウに顔を近づけた時、ふと視線を感じてドアの方を見た。

一瞬でそれは隠れたけれど、紛れもなくユーレニア国王。

「リユード、どうかしたんですか？」

「…いや…ミウは本当に、愛されているんだなあと思って…」

私は、気配が無くなったことを確認すると、不思議そうな顔をしているミウに口付けた。

その夜、ミウはユーレニア国王と王妃と共に寝るらしく、私は用意された部屋で休むことになった。そしてあることを思い出して、ティアナを部屋に呼び出した。

「ティアナ、シュカと結婚して子供をつくれ。」

私の言葉に、ティアナは絶句していた。そして顔を硬直させたま

ま、

「それは、ご命令ですか。」

とたずねた。

「そうだ。二人の子供なら、次代の王をしっかりと支えてくれる者となるだろう。二人ともこのまま子供を作らずに終わるなんて、勿体無い。」

するとティアナは長い息を吐き出して、首を横に振った。

「王よ、ご命令とあらば仕方ありませんが、シユカは私のことを…」

「想っていないと？私には、待っているように思えるが。」

「そんなことは…」

「まあいい。とにかく二人は結婚をして、子をつくるのだ。シユカは暫く、四賢人からおりてもらって、口口に代わりを務めてもらおう。彼もいずれ四賢人となるだろうし、良い勉強となるだろう。」

私の強引な言いつけに、ティアナは不服というより不安そうな表情をしていた。剣を持てば誰にも負けないこの男が、女一人に怖気づくとは。いや、女一人といっても、かなり手強い相手であることは私の目から見ても明白だが。

「式はいつにする？私が決めてもいいのなら、決めるが…」

「え？あ、ああ…お任せします。」

「では、二カ月後だな。」

「二カ月後…!?!」

滅多に驚かないティアナが、目を丸くしていた。

「そうだ。早速シユカにも伝えなければな。ティアナ、お前から言
ってやってくれ。私は自分の式の準備で忙しいのでな。」

「わ、わかりました…」

こうでもしなければ、ティアナとシユカは結びつかないのだ。ま
あお互い、満更でもないだろうしな。心なしか少し震えているよう
だけれど、国の為と思って諦めてくれ、ティアナ。

いよいよ、今日だ。

私はほとんど眠れなくて、明け方からずっと起きていた。何だか
私自身も、周りの空気もふわふわとしていて、現実味が無かった。

女官が呼びに来て、私は湯を浴びる。爪先から頭のとっぺんまで、
女官の手によって飾り立てられた。みるみるうちに別人のような自
分が出来上がった。

純白のドレス。短い時間でつくられたものだけれど、それは細部まできつちりと装飾されていた。私が着るのは勿体無いくらいだった。

やがて部屋にリユードが来て、私はまだ夢のような心地でリユードに手を引かれて、外へ出る。ヴェール越しに降りかかる太陽の光が眩しくて、目を細めた。

「ミウ、大丈夫？」

リユードに声をかけられて、私はうなずいた。リユードはいつもの平静な顔をしている。

『英雄の道』の先端、眼下に街が見渡せる場所までゆつくりと歩く。国中の人々が集まっていたが、驚くぐらいしんと静まり返っていた。

祭司が来て、私とリユードにそれぞれ指輪を渡した。まずリユードが私の指に、銀色の指輪をはめた。私は震える手で、リユードの指に、同じ色の指輪を通した。この指輪には、相手の名前が彫られている。

リユードは私のヴェールを上げて、かがんだ。私が目を閉じると、私の唇に柔らかい彼の唇が重なった。

その瞬間、大きな歓声が起こった。それは温かく、私はとても嬉しかった。

唇が離れると、リユードは微笑んで、私を抱きしめてまた口付けた。さつきよりも大きい歓声が起こり、それは、失笑のような、や

れやれ、といった笑いを含んでいた。

私はこの日を、一生忘れないだろう。世界で一番幸せな日。大切な人とずっと一緒に生きていくことが決まった日。

リユードが言ったように、これから先、辛いことも悲しいことも起こるかもしれない。けれど私は、リユードとなら共に乗り越えていきたいと思った。リユードとなら、何があっても大丈夫、そんな確信があった。

「ミウ、幸せ？」

リユードの問いに、私は笑顔で答えた。

「もちろんです。」

そして今日何度目かわからない口付けを交わした。

閑話：いつも側にいたかった【ティアナ×シユカ】

私の母は、女の子が欲しかったらしい。けれど病弱な体質だったせいか、私一人しか生むことが出来なかった。

私は、女のように育てられた。衣服などはもちろん女物だったし、髪はいつも長く伸ばされていた。私自身違和感を覚えることが無かったのは、周りの者が何も言わなかったからだ。

私の父親は四賢人だったので、身分が王族に次いで高かった。従って、周りの者たちは、何も言わなかったのではなく、言えなかったのであるうが。

そんな折、初めて私を愚弄した女がいる。

「変な格好だな。」

剣を差し、男物の戦闘着を身にまとった女。茶色の凜とした瞳が印象的だった。

「何だと？」

「男のくせに、女の服を着ているのか？」

「何が悪い。」

「別に悪くはない。ただおかしいと思ったただけだ。」

この生意気な女は、シユカといった。私と同じように、四賢人を

父に持つ。剣の腕が立ち、大男を寄せ付けぬ程だったとか。

「お前こそ、男の格好をしているではないか。」

「動きやすいから着ているだけだ。お前のように、動きにくい服は剣士にとって致命傷だからな。」

「別に動きにくくても、誰にも負けはしない。」

「試してみるか？」

シユカは私に木刀を放った。

「望むところだ。」

私は剣の腕に自信があった。そこらの大人では、相手にならない程だった。

しかし、この女は…

「弱いな。強いと聞いて期待していたが…」

あっさりと私は負けてしまった。私の剣技が、訓練の延長であるならば、この女のは、勝つための鍛錬の賜物であった。

私は悔しかった。今まで負けたのは、父しかいなかった。私はこのまま父の跡をついで四賢人になれるだろうと自惚れていたのだ。

それから私は、もっと強くなるべく、あの女を倒すべく、今まで以上に訓練へ力を入れた。

あの女に勝つことが出来たのは、十六歳の時だった。さぞ悔しがるだろうと思っていたが、あいつは涙も見せずに、さっと身を引いた。

ただその時、どこか遠くを見るように切なそうな顔をしていたのは覚えてる。その顔が今も焼きついて離れない。

丁度その頃、四賢人の座が一つ空いた。私はもちろん、四賢人となるべく志願し、しかも国王から推薦を頂いた。そしてもう一人、推薦を貰った奴、それがシユカだった。

その座を競って、私はまたこの女と戦うんだろうなと思ったが、奴は意外なことを口にした。

「四賢人には、ティアナが相応しいと思います。私は辞退させていただきます。」

そう言って、玉座の間から出て行ったシユカを、私は追った。

「何故だ？お前も、四賢人になることを望んでいるんだろう。」

するとシユカは、いつものように口の端を歪ませた。

「勿論だ。だけど今回は、あんに譲ってやるよ。」

「どづいつ魂胆だ？」

「どづもどづも、あたしはあんに勝てないと思った。それだけだ。」

生意気だが潔い女だ、私はそう思った。勝てないと知りつつも喧嘩をけしかけてくる負け犬どもとは違う。

その日以来、私のシユカに対する見方が変わった。前は、冷たくて刺々しくて近寄りたくない女だと思っていたが、良く見ると、周りの者を気遣ったり、散らかった武具を片付けたり、マメに闘技場を掃除している。

こいつは、思ったより嫌な奴ではないのでは？

そして、その思いが確信に変わる契機があった。

私が四賢人の座を勝ち取る為の戦いに望んだ時、私は剣を避け切れず右腕を負傷してしまった。幸い、大した怪我では無かったが、応急処置が必要だった。

その時、近くにいたシユカが、急いで来て手当てをしてくれた。

「止血の為に少し強く縛るぞ。」

「ああ。」

とても手慣れた手つきで、私の処置はすぐに終わった。そういえば一般兵への傷の手当も、こいつは率先してやっていたな。

それに比べ、私は、何もしようとしなかった。シユカが傷を負っ

た時も、手を差し伸べようとしなかった。私はそんな自分を、恥じた。

「…ありがとうな。」

ぼつりと言った私の言葉に、シユカは意外そうな顔をしてから笑った。

「別に大したことじゃない。」

何故だか私は、不思議な気持ちになった。そしてそれは、いつになっても、もやもやしたままで、遂に母へ相談した。

「それは恋よ、ティアナちゃん。」

「…恋!?!」

まさか私が、あんな鉄のような女に惚れたというのだろうか。しかし思い当たる点は幾つもあった。

時々、あの女の顔が浮かんできて眠れないこと、いつの間にか会うのが楽しみになっていったこと。認めたくは無かったが、これが恋だったとは。

それから私は、その気持ちを吐き出さなくて吐き出さなくて仕方なくなった。そしてある時、私は、その気持ちを吐露してしまった。

「好きだ。」

その時のシユカの表情は、大層驚いていたようだった。しかし彼

女は冷静さを取り戻すと、突き放すように言った。

「私はいずれ四賢人となる身だ。好きとかそういう感情は雑念にしなければならない。不要なものだ。」

「お前…」

「二度とその言葉を口にするな。それから、私をそういう対象で見
るな。」

それだけ言うと、シユカは去って行った。

「というお話しでございませぬ…」

私はミウ様にせがまれて、シユカとの馴れ初めを語っていた。

「へえ。本当に振られたんですね、ティアナ。」

ミウ様は、他人事のように面白そうにおっしゃった。

「ええ、ミウ様のようにばっさり切り捨てられましたよ。」

「な、何ですかそれ！それはもう過去の話です！」

「私だって、もう過去のことなんですよ！なのに国王がシユカにプ
ロポーズしろなどと…また振られたら私、生きていけませんよ！」

「でも、次は何となく大丈夫な気がするなあ。何となくだけど。」

「そんな不確かなことで励まさないで下さい。」

「ティアナ、私の予想って結構当たるんですよ。」

ミウ様はそうおっしゃって、星のように眩しく輝く笑顔を私に向けた。

「で、プロポーズはいつするんですか？」

「どうしてそこまで言わなければいけないんですか。」

「教えて下さい、応援に行きますから！」

「やめて下さい！絶対教えません！」

私はミウ様を振り切って、部屋から出た。とそこで、リユード国王と出くわした。

「ティアナ、結婚は申し込んだのか？」

「…い、いえ…」

「まったく。早くしないと、式の日になるぞ。」

「…御意。」

私は、国王が部屋へ入っていったのを見送ると、溜息をついて歩き出した。

実はミウ様には言っていないが、あのあと、続きがある。

閑話2：【ティアナ×シユカ】

私はシユカのことを諦めきれなかった。それは私が幼い頃から欲しいものを全て手に入れてきたから、なんていう単純な理由では無く、シユカに惹かれていたからだ。

自分でも笑えるぐらい、私はシユカのが好きだった。好きでどうしようも無くなるぐらい、私は想い焦がれた。

そして私は卑怯にも四賢人の特権を使って、シユカを私の部屋まで呼び出した。入ってきたシユカをいきなり抱きすくめると、シユカは抵抗した。

「何をする！」

しかし私は、シユカを離さなかった。いくらシユカが強いといっても、腕力は私の方が上だ。私はシユカを抱きしめたまま、言った。

「一度でいい。お前に口付けをしたい。」

シユカの動きが止まった。私は続けて言った。

「させてくれたら、もうお前のことは諦める。お前が望むなら、二度と口をきいてくれなくてもいい。」

「…本当、だな？」

「ああ。」

私は一旦シユカを離した。その瞳を見つめると、少し脅えたような色があった。だがやがて、その瞳は閉じられた。

私はまたシユカを抱き寄せると、その赤い唇を強く吸った。

それからのことは、良く覚えていない。シユカが去った後の部屋で、日が暮れるまでぼうつと過ごしていた気がする。

シユカはもう話しかけてきてくれないだろうと思ったが、翌日、何でもないような顔をして話しかけてきた。剣の相手をしてくれということだった。

私は少し面食らったが、大人しくシユカの相手をしてやった。ただかまりは、気が付いたら無くなっていた。

あれから随分と長い時間が経ったものだ。あの時はお前の側にいられさえすればいいと思っていたが、手が触れられる距離にいて、そう出来ないというのは中々辛いものだ。

「おい。」

中庭にいた人影に、私は声をかけられた。あんな大女は、この国で一人しかいない。

「何だ、シユカ。」

「何だじゃないよ、呼び出しておいて。」

「私は呼び出してなど…」

そう言いかけ、はっと気が付いた。きっと国王がシユカを呼び出したに違いない。全く、怖い王だ。

「で、何の用だい？」

私は、迷った。言ってしまうべきか、いやまだ心の準備が…

「そついや口口が、四賢人に推薦されたんだってね。っていうことは、誰か辞めるのかい？」

そつだ、まだシユカが四賢人を抜けることを知らせていなかった。

「いや、辞めてもらうのはお前だ、シユカ。」

するとシユカは眉をひそめた。

「どうしてだい？あたしに何か問題が？」

「そうでは無い。その…つまりな…」

「つまり？」

「私と…けっ…」

「何だい？よく聞こえないよ！」

「結婚してくれ、シユカ！」

私とシユカの間にも、何とも言えない沈黙が訪れた。シユカは顔の筋肉を硬直させたまま、私を睨むように見ている。

「…何の冗談だい？」

「冗談ではない！本気だ！」

「四賢人を辞めて、家庭に入れって？」

「そういうことだ。」

「なんでまた、あたしなんかと？お前に寄ってくる風変わりな女は、意外と多いじゃないか。」

「私は興味の無い女たちだ。それに狙っているのは、私の財産と肩書きだろう。そんな女たちよりは、お前の方がマシだ。」

あ、まずい…！ついつつかりと本音を言ってしまった。

「いや、マシというのは…」

やばい、シユカは怒っている。戦場での顔つきと同じだ。

「…まあ、あたしも結婚してやらなくてもない。貧弱な男たちよりは、女装してでも強い男の方がマシだからね。」

前半の言葉までは良かった。しかし後半の言葉は聞き捨てならぬい。

「女装だと！？この格好は、芸術そのものだ！お前には芸術がわか

らんのか！」

「残念ながらわかんないね。わかりたくもない。…あたしと結婚したいなら、その格好を辞めてもらおうよ。」

「くっ…」

私の頭に、母と国王の顔がちらついた。母の意思は尊重したい…けれど結婚しなければ、今度は私自身の立場も危うくなる…

「そんなに難しい顔をしなくても…わかったよ、女装は続けていい。それにしても、今回突然こんなことを言い出したのは、国王からお達しかい？」

「…どうしてわかった!？」

「どう見たって、あんたが自発的に、結婚してくれ、なんて言う筈ないじゃないか。しかもあたしに。」

さすが、シユカは鋭い眼力を持っているな。

「…相手がこんな男で悪かったな。お前だって、こんな私と結婚したくは無いだろうが。」

「あんたこそ、綺麗で女らしいのが良かったんじゃないの？」

「私は、10年前と気持ちが変わっていない。」

シユカは、疑わしい目で私を見た。

「…本当かい？」

「本当だ！私の方が、お前を想う気持ちは勝っている！」

…あ、ついカツとなって、恥ずかしい言葉を口にしてしまった。

「勝っている…だと？あたしの気も知らないで…」

何故か、シユカは怒っている。と、その時、シユカは私の胸ぐらを掴んだ。

「どうしてあたしが四賢人になったのか、知らないだろう！」

「し、知らない…」

「あんたとずっと一緒にいられるからだ！妻になれば戦場すらついていけないけれど…同じ立場なら、その座を譲るまで、一緒にいられる。」

「…ええ？」

私はひどく、間抜けな声を発した。

「悪いか？」

見ると、シユカの目は涙ぐんでいた。

「…いや…」

私は本能の赴くまま、シユカの体を抱きしめた。

「…でも、いいのか？私の妻になれば、供にどこへも行けなくなるぞ。」

「わかっている。だが命令なんだろう？仕方ない、妻になってやる。」

全くこの女は、本当に素直でない。

「女装も、やめないぞ。」

「わかっていると知っている。あんたは本当に、しつこいね。」

「お前は淡泊すぎる。」

「丁度いいかもね。」

「ああ、丁度いい。」

シユカの体温は、私と混ざり合うように心地よかった。しかし背後に感じた、二つの気配。

「行こうか。」

シユカも気が付いたようだ。

「そうだな。覗き見られる趣味は無い。」

私はシユカの手を引いて、その場から立ち去った。

「ミウが動くから…」

「ちょっと…私のせいですか？」

私は立ち上がって、膝についていた土と草を手で払った。

「けれど、これで子供をつくっても、不安は無いな。」

「…リユード、あんまりそういうことを人前で言わない方が…」

「ミウしか聞いていないから大丈夫だよ。」

笑顔で言うリユードに、私は何も言えなかった。明かりが点々とつく廊下を、私はリユードと手を繋いで戻った。

リユードはぽつりと、闇の中へ吐き出すように言った。

「子供を生んで、育てて、ひと段落したら…ミウと一緒に、世界を周りたいな。国のことは子供たちに任せてしまっただ。」

「…いいですね、それ。世界の色々な国へ、行ってみたいです。」

するとリユードは、パツと顔を輝かせた。

「だろっ？きつと楽しいよ。」

私は別に、どこだって構わない。この人の側にいられるのなら。

この人がいるなら、どんな場所も私にとって至上の場所となる。

「何年後かなあ…」

私は呟いて、彼の少し湿った手を強く握り締めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5061d/>

蒼炎の姫君

2011年1月9日14時32分発行